



# 教職大学院 Newsletter

# No. 171

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2023.5.31 (公開版)

## 「研修観の転換」に向けて

### ～ NITS 次世代型教職員研修開発センター ～

独立行政法人教職員支援機構 審議役(兼)次世代型教職員研修開発センター長

佐野 壽則

#### 【「次世代型教職員研修開発センター」の発足】

この4月、NITSに、「次世代型教職員研修開発センター」(以下、「次世代型センター」)が立ち上がりました。

文科省の発案を原点に、昨年度はじめから構想を練り、発展的改組により約30人の体制で立ち上がったセンターです。つくば本部の中に置かれ、NITSの研修実施体制は、2割程度大きくなりました。

次世代型センターのミッションは、教員免許更新制の発展的解消を受けた「新たな教職員の学び」について提案し、「研修観の転換」を推進することです。教員免許更新講習とは異なる、自律的で主体的な教職員研修をどうつくればいいのかを考え、考えるだけでなく研修として実践・改善し、その成果を全国に提案していく、そのような動的な使命を帯びているのが、このセンターです。

#### 【次世代型センターの3つの柱】

次世代型センターの当面の柱は、次の3つです。

1つ目は、探究型の研修の開発です。多くの人が、子供達に「探究的な学び」を届け、よりよく課題を発見し解決する力や学習を自己調整できる力を育む必要性を感じ、学習指導要領にも幅広く位置付けられた一方、「探究的な学び」とはどのようなもので、どうやってデザインしていけばいいかは「手探り」の状況

が続いています。先生方自身が学校教育で探究的に学んだ経験が乏しい以上、「手探り」となるのは当然です。

中教審では、「探究心を持ちつつ自律的に学ぶ教師」像が提案されていますが、そのような教師像を実現していく上でも、探究とはどういうことかを体感しながら、教師の「課題を探究する力」や、「探究的な学びをデザインし、マネジメントする力」を高める研修をつくるのが大事だと考え、開発を進めています。これらの力は教師に中核的(コア)に求められている力と考え、この研修のことを「コア研修」と呼んでいます。

2つ目は、教育行政リーダー研修です。これまでNITSでは、校長や中堅教員等を対象に職階別の中央研修を行ってきました。他方、教育委員会の課長や次長といった教育行政リーダー向け研修は、ほとんど行われてきませんでした。各地域の教育委員会と深

#### 内容

巻頭言	(1)
院生自己紹介	(4)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(19)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(21)
4月月間合同カンファレンス報告	(25)
公開研究会等のお知らせ	(34)
実践研究福井ラウンドテーブルのお知らせ	(38)

く関わると、「県や市町村をまたぐと、こんなに教育行政の在り方は違うのか」と驚かされることが、少なくありません。そうであれば、教育行政リーダーが、膝を交えて教育行政について対話する機会は貴重なものとなるのではないかと。このような素朴な思いから、開発を始めた研修です。

昨年度後半からは、予定されている講師陣と白熱した議論を繰り返し、「既存の思考に囚われることなく課題を設定する力や、学校の内発的な改善を促す力」を高めることを研修の目標とすることとなりました。コア研修と同じく、今年度から開催することとなります。

3つ目は、「新たな学び」を牽引するオンライン研修です。NITSでは、コロナ下にオンデマンド動画の作成・提供を進め、200本以上の動画を作成、200万回以上の視聴を頂いています。そのほとんどは、20分や10分といった短尺の動画で、カリキュラム・マネジメント、生徒指導、体力向上など多様な分野について、有識者に要点を講義してもらっています。次世代型センターでは、この取組を発展させ、これまでと異なるテーマ（例えば、「子供の学び」ではなく「教職員の学び」について）や、異なる撮影スタイル（例えば、講義型ではなく対話型や事例型）などに挑戦することとしています。オンデマンド動画は、コア研修のように、プロセスとして学びを提供するものではなく、直接的な研修効果に限界はありますが、日々、現場で試行錯誤している先生方に、自らの探究の過程で上手に活用して頂ければ、大きな力になるかもしれません。

今後、次世代型センターでは、文科省が開発中の教職員研修プラットフォームシステムも活用してもらい、オンデマンド動画をはじめオンラインを使った学びの形をこれまでの学びの形と組み合わせ、全国の教職員を一層支援していきたいと考えています。

#### 【「新たな教職員の学び」の協働開発】

以上3点が、現在の次世代型センターの柱ですが、これらをNITS単独の取組として進めるのではなく、全国の教育委員会・教育センターや大学、民間団体等と協働して進めていきたいと思っています。

昨年夏から秋にかけて、荒瀬理事長をはじめとした役職員で、全国の教育委員会を約30か所訪問し、今後一緒に「新たな教職員の学び」を開発していきたい旨、教育長等と膝詰め話をさせて頂きました。どの教育委員会でも温かく迎えて頂き、関心の高さを肌で感じました。結果、昨年末の正式公募を経て、この4月から、9人の特別研修員、2人の出向者を、次世代型センターに新規に送って頂いています。

派遣頂いた特別研修員等にはこれから、NITSで「新たな教職員の学び」を共に作り上げて頂くこととなります。同時に、出身自治体とも緊密に連絡を取り続けてもらいます。というのも、特別研修員には、1年目はつくば、2年目は出身自治体に拠点を置きつつ、2年間を通じて、出身自治体における「新たな教職員の学び」を企画・運営することが期待されているからです。具体的には、1年目はNITSの業務に携わってもらいつつ、出身自治体が次年度に行う新たな研修の企画を地元教育センターとともに考え、2年目には、地元教育センターで1年目に企画した研修を運営する役割を担うことが想定されています。

NITSと自治体が、特別研修員を媒介として、共に「新たな教職員の学び」を作り上げていくというのが、次世代型センターの中核的な構想であり、人的な交流に基づく研修の協創により、はじめてNITSが本当の意味で、教職員の資質能力向上の「ハブ機能」を担えるようになるのではないかと考えています。

#### 【教え手の探究心】

ただ、構想を語るのは簡単ですが、実際に「新たな教職員の学び」を創り上げるのは簡単なことではありません。それは、とりわけ探究的な学びのデザインは、研修提供者が「理解」するものではなく、「探究」し続けるものだからだと思います。

探究的な学びを、ワクワク感と不安感の双方を感じながらデザインしていく感覚は、従来型の講義・演習形式の学びにはないものです。学び手に探究に不可欠な「自由」を渡し、だからといって「放任」ではなく、探究が切れず、深まるよう、対話やリフレクションの機会を設け、知識を提供し、プロセスとして学びの時間をデザインしていく、そういった学びの形は、私達に強烈に刷り込まれている、教え手の視点か

ら、事前に決めていることを伝えたり、やらせてみたりする学びの形とは大きく異なります。

このような学びを展開する教え手は、学び手の「自由」と引き換えに、「不確かさ」に耐えなければなりません。それに耐えられず、「学び手が探究する学び」をつくっているつもりが、気が付くと、「探究の手法を教え込む学び」に置き換わってしまうこともあります。探究型の学びは、学びの形が常時未完成のままであることを受け入れ、ワクワク感と不安感の双方を感じながら、より良い学びを追求する、「探究心を持った」教え手を必要とするのだと思います。

探究型の研修の開発に昨年来取り組む中、このようなことを実感し、学習観の転換、その相似形としての「研修観の転換」は、「言うは易く行うは難し」などと日々感じています。

### 【学び合いのコミュニティ】

だからこそ、「支え合う」ことが必要だと思っています。NITS では、NITS や全国の挑戦を支え合えるよう、次のようなことに取り組もうとしています。

1つは、「研修マネジメント力育成プログラム」、通称「マネプロ」です。マネプロは、特別研修員をはじめとしたNITS在籍の職員を対象とした研修プログラムです。1年を通じて、毎月2回、毎回2～3時間程度、対話を中心とした職員同士の学び合いを展開し、『『新たな教職員研修』とはどういうもので、我々は、どのように『研修観の転換』を図ればよいか』という大きな問いに、それぞれの答えを見出していくこととなります。

もう一つは、特別研修員等の出身教育委員会との意見交換です。特別研修員等が1人で自治体の研修を変えることはできず、教育センター等の中に研修作りのチームが立ち上がるなど、組織としての取組が不可欠です。このため、NITSの役職員が、出身教育委員会を訪問して、教育委員会・教育センターの幹部と話をさせてもらったり、時には、職員を対象に、「新たな教職員の学び」についての研修をさせてもらったりするなど、組織としての取組を可能な限り後押しできればと思っています。

マネプロや教育委員会との意見交換を通じて徐々に形成されるだろう、「新たな教職員の学び」の実現

に向けた学び合いのコミュニティが、NITS や教育委員会の挑戦を根幹で支えてくれるのではないかと感じています。

### 【大学等との協働と福井大学への感謝】

「新たな教職員の学び」の開発に際しては、大学や民間団体との協働も行っています。

そもそもNITSは、大学等の研究者との関わりが非常に大きな組織です。NITSの研修の大半には研究者に登壇して頂いていますし、調査研究は研究者にご依頼し実施しています。特に、現在、全国8つの教職大学院の中に、NITSの地域センターが設けられおり、今後、これらの地域センターにおいても、NITSの方向性を踏まえつつ、各地の教育委員会等と連携し、「新たな教職員の学び」を具体的に作り出していくことが志向されています。

また、上記のコア研修やマネプロといった、次世代型センターの中核となる取組を企画、実施するに当たっては、松木理事、柳沢教授をはじめ、福井大学の先生方の多大なご示唆とご支援を頂き、文字通り支えてもらっています。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。「NITSのせいで福井大学に先生がいない、、、」といった声を漏れ聞いたこともあり、その度に恐縮な思いになるのですが、今後とも、どうぞお見限りなく、お付き合いのほどよろしくお願い致します。

### 【最後に】

「研修観の転換」と銘打たれた、「新たな教職員の学び」を全国で形作っていく今回の動きは、学習観や教育観が容易に変わらないのと同様、簡単に進むものではないと思っています。ただ、私の周りだけかもしれないかもしれませんが、学びの「観」を転換する必要があるという合意は、全国で少しずつ広がっているように感じます。

多くの方々との協働のもと、急ぎすぎず、一步一步、着実に取り組むことで、新しい景色が見えてくればよいなと思っています。



## 院生自己紹介

新入学院生の自己紹介のコーナーです。今号ではミドルリーダー養成コースの14名を紹介します。

### 福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程（1年履修）

#### 河合 創（かわい はじめ）

こんにちは。河合創です。河合創をGoogleで検索すると、10年くらい前までは「笑える名前を晒すスレ」という失礼きわまりないサイトで、「かわいそう」と紹介されることが多かったです。最近、Googleの人権に配慮した努力の結果と、私自身の論文や共同研究でのレポートなどの名前が結果として上がるようになり、しめしめと思っています。

実際は「はじめ」と読みます。父親が名付けたらしいのですが、僕が生まれた当時、父は、どうしてもこの「創」という漢字をつけたかったそうです。無口な父はその理由を語ってくれたことはありません。母親もよく知らないそうです。出生届に名前を書き、役所に提出しに行ったとき、係の方に、「本当にこれでいいんですか？」と聞かれたそうです。父は自分の姓を計算に入れていなかったようです。提出間際になって「かわいそう」な男が誕生することに気づいたのです。そして、父は「ま、いいか」と思って提出をし、無事受理されました。

僕が、自分の名前の真実に気づいたのは小学5年生のときです。進級後、真新しい国語の教科書をもたらったときに、その表紙に「創造」と書かれていました。「先生、これなんて読むんでしたっけ？」「それは、そうぞう、と読みます。」「へえ～、そうぞうか。・・・ん？・・・おやおや。」

それからしばらくは自分の名前に悩みました。当然、僕の友人も気づき始めるので、からかいはじめます。当時の僕に、それをユーモアで返せる技量もなく、苦笑いの日々でした。父は僕にとっては恐ろしい存在だったので、問いただすわけにもいきません。

中学生のときに転機が訪れます。担任の先生が国語の先生でした。その先生が「創」という字について「つく・る」と読むと教えてくれました（きず、と読むとも教えてくれました）。「作るとか造るとどう違う？」と問いかけられました。僕には分かりませんでした。先生は、「創には、無から有を生み出す、という意味があります」と教えてくれました。数年に渡る僕の悩みが消え去る瞬間でした。

やがて、僕は英語の教師になりました（国語じゃないのかよ）。今となれば、自分の名前をととても気に入っています。なぜなら、教員の仕事ほどクリエイティブなものはないと思えるからです。授業のデザイン、教材づくり、学級経営、行事の企画・運営、研究、人とのつながり、あらゆることにおいて「無から有を生み出す」活動の連続です。つらい、つらい、つらい、けれど楽しい。

令和4年度、福井大学教育学部附属義務教育学校の後期課程に着任しました。教員15年目の春です。それだけの経験年数を重ねると、ある程度「やれてしまふ」ことも増えてきました。いろんなことに予測が立てられるようにもなりました。しかし、附属ではそうはいきませんでした。子供を主体にした授業づくり、学校づくり。言葉としてはよく見聞きするものですが、教職員全員で本気でそれを実現しようと取り組もうとする学校で、僕は初任者になりました。いちから授業を考えています。いちから学級経営を考えています。いちから生徒指導を考えています。いちから部活動を考えています。苦しい、つらい、しんどいこともある。独りじゃ絶対やれない。でも、同じ悩み

を抱えながらも、同じ方向に向かってがんばる同僚の先生がいて、とても楽しい毎日を過ごしています。

今年度、教職大学院の一年履修という形で、改めて自分の教育観・指導観を見つめ直し、これからの展

望を考える機会をいただきました。教員としての仕事を一回り経験して、クリエイティブにアップデートできたらと思っています。たくさんの方々との交流をととても楽しみにしています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

## 福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程（1年履修）

### 布目 康裕（ぬのめ やすひろ）

今年度入学しました布目康裕です。昨年度から、事前履修で学ばせていただき、ミドルリーダー養成コースに在籍しています。現在、福井大学教育学部附属義務教育学校に勤めております。附属での日々の学びが、今日私が大学院で学ぶきっかけとなっています。

今回、初めてこのような形で自分を伝える機会をいただき、何を伝えようか悩みました。執筆しながら悩み、伝えていこうと思います。

事前履修のある日の講座で、自分のこれまでを振り返る機会がありました。一言で表すなら、「非常識」です。

まず、これまで中学校勤務が長かった私ですが、一度も中学1年生から3年生まで持ち上がりで担任したことがありません。3年連続3年生担任や、2年連続1年生担任、きっと学校の実情に合わせた人事だったのだと思います。だからこそ、卒業生とのつながりも多く、幾度となく成人式(はたちの集い)に参加し、教え子の社会での活躍を聴き、感動することができます。中には、教育実習に来た教え子もいました。

部活動指導にも尽力しました。定期テスト前の部活動停止以外、ほぼほぼ部活動指導をしていました。専門外のサッカー部でした。副顧問とはいえ、部員数も多かったので顧問と同じでした。北信越大会や全国大会まであと一歩のところまで部員たちに連れて行ってもらいました。今は部活動指導がない生活に慣れてしまいました。もう戻れないかもしれませんね

もう一つは、今の附属義務教育学校は、私にとって初めての小学校勤務です。コロナ禍突入と共に異動し、初めての授業は、忘れもしない動画配信。誰もいない教室で、子供たちの反応もない中で、どきどきしながらわり算の授業を作ったことを、これからも忘れないことでしょう。

私が教師を志したきっかけは、3つありました。1つ目は、私自身もともと子供が好きで、面倒見がよかったことにあります。2つ目は、「教師＝物知り＝ヒーロー」という幼少時代の私の頭の中でできた公式です。小学校の時の担任の先生の姿から生まれたものです。3つ目は、高校の担任の先生との個人面談で言われた「お前は教師になれ」。この言葉の数か月後、先生は病気で他界しました。今、こうして教師としての自分と共に仕事ができないのが残念ですが、きっと空から見ていると思います。

そんな私は、現在教職大学院で学び始めています。もともと学ぶことが嫌いではないので、カンファレンスで出会う先生方や教職大学院のスタッフの方からの学びは新鮮で、自分事として捉えるようになっています。1年間の履修ではありますが、昨年度からの私自身の実践を「進化・深化・新化」できるようにしたいです。

私の専門教科は英語です。今年度は、附属義務教育学校前期課程(小学校)だけでなく、後期課程(中学校)でも、授業を担当しています。また昨年度から視聴覚主任として、ICTの効果的な活用方法を日々模索しています。今の私の大きな柱になっているものが、英語とICTです。英語では、前期課程の授業に

焦点を当て、「発信」をキーワードに、子供たちと今授業を進めています。研究集会も控えており、授業展開に日々頭を悩ませています。教科を横断した学び、今の環境でできる授業実践、公立学校に還元できる授業実践をしていきたいです。これらを先ほど述べた「進化・深化・新化」に対応できることを目指してもいいのかなと考えています。ICT では、すべてをタブレットで行うのではなく、紙でまとめることの良さも忘れず、子供たちの学びの助けとなる文房具として、効果的な活用を見つけないでほしいです。

この1年は、常に脳に汗をかき続けていると思います。実践だけでなく、学級経営や校務にも常にアンテナを張り巡らせています。新時代の幕開けのように、様々な規制も緩和され、様々な交流が活発に行われるであろう2023年。謙虚さを忘れず、学び続ける教師として、若手の良き姿となるよう、精進していきたいです。

最後になりましたが、これからどうぞよろしくお願いたします。カンファレンス等でたくさん語り合うことを楽しみにしています。

## 石川県立明和特別支援学校 東 永見 (あずま えみ)

私にとって、大事な出会いがあります。それは、大学時代の先生との出会いです。

研究室に入る際、私はA先生の研究室に入ろうと思っていました。卒業論文で取り組みたいテーマをすでに決めており、A先生ならそれを許してくれそうだなと思ったからです。しかし、A先生が異動され、困った私は、残った先生の中で、一番穏やかで優しく見えた先生の研究室に入りました。これが、のちに私にとって大きな影響を与えてくれる先生との出会いでした。当時は、「卒業論文を書き上げる1年間だけの付き合いだ」と思っていたのですが、大学を卒業して20年経った現在でも連絡を取れる関係でいます。私は、障害児教育を専攻していたのですが、先生の「子どもの行動には必ず意味がある」という考え方や「1つの行動を細かく分解して学習につなげるところ」「子どもの興味から学習につなげるところ」がとっても素敵だなと思っています。

私は大学を卒業して、福祉の仕事を転々としてきました。病院で高齢者の方の入浴や食事の介助、通所施設で障がいのある方の支援。仕事が3年続かず、何なら続けられるのだろうかと考えた時、大学時代に行っていたボランティアは4年続いていたことに気付きました。大学受験で第1希望の学部へ落ち、何となくで選んだ「教育学部の障害児教育」でした。何となくで選んだ分野をもっと知りたいと思い、障がい

のある人にかかわるボランティアをしました。就学前の障がいのある子どもたちが通う施設で、子どもたちと一緒に遊んだり、ご飯を食べる手伝いをしたりしました。自分が続けられる仕事を探しながら、そのうち障がいのある子どもの教育に携わりたいと思うようになり、30歳で特別支援学校の教員になりました。現在12年目となります。

私には、向きたい方向があります。教師が子どもの学ぶことを決めるのではなく、子どもから出発するような教育がしたい。時間がかかっても、子どもが試行錯誤を繰り返しながら学びを作り上げていくそばで、子どもが困った時にそっと手伝えるようなかわり手でありたい。しかし、今までは本気で取り組んでこなかったように思います。「時間に余裕がないから」「周りの人が理解してくれないから」「すでにこういう風に決まっているから」言い訳ばかりで何も進んでいない状況が嫌になりました。自分が大事に思っていることをちゃんと大事にして、自分がやりたい姿に向かってちゃんと行動を起こせるようになりたいと思いました。こちらの大学院では、私がやりたいことを存分に受け止め、励まし、応援してくれると感じています。大学院の2年間では「子どもに沿った教育を周りの人たちと一緒に考えること」に取り組んでいこうと思っています。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。  
ミドルリーダー養成コースに入学した東 永見  
(あずま えみ)です。よろしくお願いします。

## 沖縄県宮古島市立伊良部島小学校・中学校 儀間 裕勝 (ぎま ひろかつ)

今年度、福井大学連合教職大学院のミドルリーダー養成コースに入学した儀間裕勝と申します。沖縄県の離島である宮古島のさらに離島に位置する伊良部島の唯一の学校、宮古島市立伊良部島小学校・中学校で勤務しています。無料で渡れる橋としては、日本一最長の3540mを誇る伊良部大橋の先にある創立5年目の新しい学校です。4月に赴任したばかりで、まだ掴み切れていないところもありますが、4学年(単学級)32名の担任として、日々奮闘しています。今年度で教職9年目になります。これまで、学級担任に加え、教務主任や校内研主任等の学校全体に関わる重要な公務分掌も経験させてもらいましたが、日々、多くの課題を感じていました。教職大学院は、自身の教師としての専門性を高めるチャンスだと考え、チャレンジすることにしました。

私が教職大学院への入学を考えたきっかけは、沖縄県立総合教育センターで行われる半年間の長期研修に参加したことでした(以下、長期研)。これまで学級担任として、授業づくりを基盤とした学力向上の推進に重点を置き、子ども達が主体的に「やってみよう」と思えるような授業デザインや指導法の工夫改善に努めてきました。その中で、自身の力不足を痛感し、教師としての専門性を高めていきたいと考えようになりました。長期研では、主事の方々の指導の下、他の研修員の先生方と切磋琢磨しながら、算数科の授業づくりに関する研究を自身のテーマに設定し取り組みました。理論研究や授業づくり等に粘り強く取り組むことができたこの研修は、私の授業実践との向き合い方に大きく影響を与えていると感じています。また、授業実践の楽しさや「すべての児童が成長を実感できるような授業をつくりたい」という、教師を志した自身の原点を改めて実感させられるものでした。この長期研での経験が非常に良いも

のであったと現場で話していたところ、当時の管理職に教職大学院を薦められ、興味を持つようになりました。

しかし、教職大学院入学に関しては、出願期限のギリギリまで悩んでいました。教職員の日々の業務は、ただでさえ多忙を極めています。そこに加えて教職大学院で学ぶことなど、本当に可能なのかと考えていたからです。「とても無理だ。断ろう」と何度も考えましたが、多くの先生方に背中を押され、気づけば教職大学院で学ぶことを決心していました。教職大学院への入学を後押ししてくれた先生方には、感謝しかありません。

さて、現在、私が課題に感じていて、教職大学院で学んでいきたいこととして、2つの視点があります。1つ目は、教務主任や学力向上推進担当、校内研主任といった学校運営をリードする立場としての視点です。校内研を任された際、研究について先生方全員と共通認識を作るにはどうすればいいのか、学校全体で協働的に実践して行くにはどうすればいいのか多くの課題を感じました。校内研だよりを発行したり、研究授業・授業研究会を工夫したりと、試行錯誤しながら取り組みましたが、なかなか上手くいかず、協働で取り組むことの難しさを実感しました。教職大学院の経験豊富な先生方から、課題解決の糸口を見出したいと考えています。

2つ目は、学級担任としての視点です。何年やっても、学級経営の悩みは尽きません。多様な子ども達が、個々の特性を生かしながら互いに認め合い、高め合えるような学級コミュニティづくりについて課題を感じています。また、教科指導において、児童が主体的に考え、探求していく力を育みつつ、学習内容を

しっかりと習得させることができるような実践的指導力を身につけたいと考えています。

今年度は学級担任ということもあり、学級の子ども達に目を向けて、「主体的・対話的で深い学びの実

現」と「支え合い、学び合える学級コミュニティづくり」について深めていければと考えています。

教職大学院での出会いを大切に、経験豊富な先生方から、多くのことを学べることをとても楽しみにしています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

## 札幌新陽高等学校 号刀 悠貴 (ごうなた なおき)

今年度からミドルリーダー養成コースで学びます。実は、教職大学院には3年ほど前からご縁を頂いていました。札幌、奈良、福井のラウンドテーブルや、カンファレンスに参加させて頂き、多くの勉強をさせてもらいました。

ラウンドテーブル等で勉強させてもらう中で、学びの多い時間を過ごすことができました。その学びを現場で活かしていくこともできました。しかし、それは氷山の一角であり、問題は多く残っています。そしてそれは私の学校だけでなく、隣の学校でも起きています。抱える問題はフラクタルであると考えた時、もっと多くの課題を解決し、新しい一石を投げたいと考えました。そのためにも、教職大学院に入学し、学びをさらに深めていきたいと思えます。

大学院へ入学のタイミングで、勤務先も変わりました。私立札幌新陽高校です。この学校については後ほど記載いたします。それまで勤めていた高校が、小樽にある私立北照高校で13年間、勤務していました。この期間の中だけでも、教師として大切にしていることが変化していききました。

20代前半では、とにかく生徒が「この高校に来てよかった」と思ってもらえるよう、担任業務や教科指導はもちろんのこと、私は生徒会担当でもあったので、学校祭や各行事を盛り上げ、在校生の学校満足度を向上させることに重きを置いていました。

6年ほど働き、視点が変化しました。特色ある学校にしていこうために、「自分は何ができるだろう」と考えていました。そこで始めたのが、ワインプロジェクトでした。生徒がブドウの栽培からワインを製造し、販売するまでの6次産業を通して「働くこと」を

学ぶ授業です。大事にしていたことが、生徒から学校のコンテンツ作りへと変化していききました。

ワインプロジェクト立ち上げの際、反対意見も多いうちに進めた結果、先生方と大きな軋轢を生んでしまいました。私自身が同僚と協働的になる姿勢もなく、当然ながら同僚からも距離を取られました。しかし、このプロジェクトを持続させるために、仲間を作らなければならないと考え、自身の行動を省みました。その結果、私が退職してもプロジェクトは進んでおり、新たなプロジェクトも生まれました。大事にしていたことが、コンテンツから教員のチームづくりへと変化しました。

上記の経験を経て、現在の職場は札幌新陽高校となりました。この学校は北海道内でもかなり異色の学校で、様々なことに挑戦している学校です。ICTの使い方は間違いなく最先端であると思えます。また、東京大学名誉教授 佐藤学先生の「学びの共同体」に学校として取り組み、座席はどの教室も4人1グループが複数作られています。職員の働き方は、「学習する組織」の理論を取り入れ、月に一度は職員同士が会議とは異なる「対話」をする時間を取っています。その他、ここには書ききれないほどの多くのことに取り組んでいる、良い意味でカオスな学校です。

上記の通り、挑戦的な学校で、先生方は前向きであり、カオスな学校ですが、課題も多くあります。正直、まだ課題を明確に捉えることができていません。だからこそ、この学校がもっとどのように良くできるのかを見定めたいです。そして、新しい学校の在り方をこの学校なら示せると考えているので、良くも悪くもモデルを作れるよう、新陽高校の課題をキャ

ッチし、解決できるよう、大学院での学びに取り組んでいきたいです。

## 福井県立若狭高等学校 澤田 更紗 (さわだ さらさ)

初めまして。今年度から、ミドルリーダー養成コースでお世話になります、澤田更紗と申します。教職大学院で様々な先生方にお会いでき、一緒に学びを深められることをとても楽しみにしています。

私は現在、小浜市にある福井県立若狭高等学校に勤務して、6年目になります。若狭高校には初任で赴任し、あっという間に6年目になりました。担当科目は英語で、生徒が主体的・対話的に学べる授業について教職大学院でも考えていきたいと思っています。このように考えるようになった大きなきっかけの1つとして、昨年度自主研究として、他の先生方と対話について学んだことがあります。p4c という哲学対話の手法について、研究の一環として新潟県佐渡市や、ハワイ大学で学ばせていただきました。どの授業においても p4c を使って生徒がお互いに考えを言い合う環境が作られていることに驚きました。特に、ハワイの小学校で参加したクラスの p4c では生徒が知的安全性の高い環境を自分たちで作らだし、自分の考えていることをどんどん発言し、対話で学びを深める姿に感動しました。また、その中で生徒たちが積極的に日本からきた私たちを巻き込みながら、対話を深めようとする姿や、いきなり日本からきた私たちと話すことを楽しみ、ぜひ若狭高校の生徒とも交流したいと言う姿を見て、主体的に学びを深めようとする生徒を育てるためには対話が必要だということに改めて感じました。それと同時に、自分自身も生徒と共に知的安全性の高い環境を作り、対話的に学びを深めていきたいと考えるようになりました。ハワイでは多様な背景を持つ生徒たちが、対話を通してお互いの多様性を認め合っていました。英語という教科においても、英語の技能を学びながら、他者を尊重し、相手の文化的背景や多様性を認め合う姿勢というものについても学べたら、これからの社会を生きる生徒たちにとってより良いのではないかと思います。

ます。これまで英語の授業の中で、言語活動をすることに焦点が当たることで、生徒が話したいと思うことよりも先に活動することが優先され、深まらないまま終わってしまうことがありました。生徒の話したいという気持ちを深められる授業デザインを考えていきたいです。

また、今年度、私は普通科2年生の担任、SSH 研究部を担当することになりました。それに伴って初めて、普通科文系の探究を主担当として担当することになり、生徒が前向きに取り組める探究の授業デザインについても考えていきたいと思っています。特に普通科は生徒も多様で、探究の内容も多岐にわたっています。自分自身が知らなかったようなことも生徒から知ることができ、楽しく思う一方、生徒の探究活動をより良いものにするにはどうしたら良いかということ日々考えながら授業に取り組んでいます。普通科には、自分に自信のない生徒や、自ら何かを発信するということに対してあまり前向きではない生徒もいます。そういった生徒ともじっくりと対話をする中で生徒の主体性を引き出していけるのではないかと考えています。

教員としてはまだまだ経験も浅いのですが、英語の授業や探究の授業など自分が主体となって動く場面も増えてきており、ミドルリーダーとしてどのように貢献したら良いのか、改めて考えたいと思っています。また、これまでを振り返ると、じっくりと教育について学んだり、学校での実践の振り返りを行う時間を取ってきかず、自分自身の知識不足を感じる場面も多くあります。また、自分が考えていることを問い直し、言葉にするということも積極的にしてこなかったため、自分が考えたことや学んだことを論理的に書くことの難しさも感じています。しかし、生徒に主体的に学んでもらうためにも、自分自

身が主体的に学びを深められるようになりたいと考えています。

教職大学院では、他の先生方のお話を聞きながら、じっくりと考え学びを深めていきたいと考えていま

す。2年間という短い時間の中ですが、この機会に感謝し、お会いできる先生方との出会いを大切に、学んでいきたいと思います。よろしく願いいたします。

## 奈良女子大学附属幼稚園 穴戸 佳央理 (ししど かおり)

今年度より、ミドルリーダー養成コースに入学いたしました穴戸佳央理と申します。

現在、奈良女子大学附属幼稚園に勤務しており、今年で3年目になりました。

それ以前は、東北地方宮城県の公立小学校や附属幼稚園に勤務していました。東日本大震災やコロナ禍においては、当たり前の日々を送ることができる尊さを感じ、教育に何ができるのかを模索する日々が続きました。様々な場で実践を重ねてきたことが、自分自身の糧になっています。

中でも人事交流で異動した附属幼稚園では、保育という営みと子どもの育ち、その中心を担う「遊び」を追究することを通して、幼児教育の面白さと奥深さを実感しました。創造性、専門性が求められる幼児教育において、確かな理論を基に、より深く実践に向き合っていきたいと考え、本園に赴任するに至りました。

そして本園で実践した2年間、私の教育観は大きく変容しました。これまでの実践を振り返ってみると、教師の在るべき姿をもち、「～でなければならぬ」という思いを強くもっていたように思います。その時その時で自分なりの正しさや正解を探していました。時にはそこに子どもたちを導いていくような感覚もあったかもしれません。しかし、その時の感覚は、現在もちえているものとは異なっています。

本園では、今年度「ともに世界に意味を創り出す教育をデザインするー誰もが学び続けるシステムの構築ー」をテーマとして研究に取り組んでいます。対話や省察を通して実践を捉える機会が多くありますが、赴任した当初、それらをよく理解することができませんでした。どこに向けて話が進んでいるのか、何

のためにしているのか、分からないまま日々が過ぎていきました。しかし先生方と対話を重ね、それぞれの言葉の背景にある教育観や捉え方の差異が問い直しとなり、遊びとは何かという本質的な問いに向き合う機会や、探究や協働など、これまで当たり前に使ってきた言葉に向き合い、自分自身の実践を振り返る機会をもつ日々を重ねるにつれて、実践の捉え方が変わっていくことを実感していきました。実践を「正しさ」で捉えるのではなく、実践の背景にどんな意味があるのか、何のためのものなのか、実践の主体である子どもにとっては、どのような意味があったのか、私はなぜそう捉えようとしているのか…実践を見つめる思考そのものが変わっていったのです。

思考が変わると、語る言葉も変わっていったような気がします。どんな方法、やり方で実践をするのかではなく、子どものどんな育ちを支えていきたいのか、目の前の子どもの姿から実践を語るようになっていきました。今は、子どもとともに実践を創る意味の面白さや難しさと向き合っています。

また赴任した当初は、「東北と関西」「附属と公立」「幼稚園と小学校」など、様々な視点から教育を捉えようとしていました。もちろんそれぞれの地域性、文化や伝統によって、教育の在り方は異なります。例えば「小学校は」「幼稚園は」と主語が変わって語られることも多いものです。しかし、様々な先生方とお話をさせていただいたり、自分自身のこれまでを振り返ったりする中で、大切にしている本質は変わらないことを感じました。

だからこそ実践の意味を問うときには、それらを支える理論や歴史的・文化的背景を理解すること、実践者がどのような理論や教育観をもち、日々を紡い

でいるのか、どのように物事を捉え、意味づけて実践で体現しているのか、本質に迫る背景を理解していきたいと思っています。そういった意味で、私が大学院で一番楽しみにしていることは、ラウンドテーブルなど先生方と語り合う時間です。校内外、異校種の先生方で構成されるコミュニティで学びを深め、自

分自身の実践も振り返りながら、保育の質、専門性を高めていきたいと考えています。

これから始まる大学院での学びで、実践を語り直し、問うていくことで、どんな世界が広がっていくのだろうとわくわくしています。2年間よろしくお願いたします。

## カリタス女子中学高等学校 高橋 美幡 (たかはし みはた)

今年度よりミドルリーダー養成コースに入学いたしました高橋美幡と申します。神奈川県にありますカリタス女子中学高等学校という中高一貫の女子校で図書館専従の司書教諭として勤めています。取得免許は中学校一種(社会)、高等学校一種(地理歴史)で、司書教諭と司書の資格も保有しております。

大学卒業後は一般企業に勤め、学校とは無縁の仕事をしていました。学生の頃から図書館の仕事には興味があったものの、仕事に就くには狭き門であったため、はじめから諦めて別の道に進んでしまいました。しかし仕事で行き詰まった時に「やはり図書館で働きたい」という思いが湧き、「正規職員ではなくてもいいから図書館で働きたい!」と転職を決意。大学図書館で派遣職員として勤めることになりました。暫くは充実した日々を過ごしていましたが、規模が大きい図書館で分業制のため、任される仕事も限られており、段々物足りなさを感じるようになりました。そのような状況の中で、「学校図書館であれば全ての業務に関わることができるかもしれない」「学校で働くならば司書教諭の資格を持っていた方がよいかもしれない(当時は司書資格のみ保有)」「そのためには教員免許を取らなくてはいけない」と考えを巡らせ、働きながら教員免許の取得を目指すことになりました。かなり遠回り(本当はもっと紆余曲折ありましたが…)をしましたが、縁あって現職に就くことができました。

さて、紹介が遅れましたが本校の図書館は校舎の中心に位置しています。エリアの半分はガラス張りです。吹き抜けになっており、とても開放的な空間です。

蔵書は約40,000冊で、趣味の本はもちろんのこと、授業や探究活動で扱いそうなテーマの本も積極的に集めています。また、新聞記事検索などの有料データベースや電子図書館システムも導入しており、紙媒体以外の情報源にもアクセスすることができます。電子図書館のコンテンツ数はまだ少ないのですが、徐々に増やしていき、リアルとバーチャルが融合した図書館を目指したいと思っています。そして生徒には、さまざまな情報源の特性を知り、それらを使いこなせる力をつけて欲しいと考えています。しかし、どうしてもインターネットの情報に頼りがちな生徒が多いのが現状です。校内で一人一台iPadを持つようになってからはその傾向がより顕著になったような気がします。インターネットもうまく使いこなせば有益な情報が得られますが、それだけでは不十分です。信頼性の高い情報を見極められるようになるためには、きちんと情報が精査された本にあたる必要があります。ただし、最新のトピックスとなると本がまだ世の中に出ていない場合もあり、テーマ設定に悩まされることがあります。私が教職大学院での学びを希望した理由も、そのような状況下での図書館運営に行き詰まってしまったからです。

そもそも私はこれまで実践の記録を取っていませんでした。年度末に運営報告や振り返りを簡単にまとめる機会はあるものの、一つひとつの実践についての細かな記録はありません。授業支援にしる、読書支援にしる、問題だと感じたところは日々改善に努めてきたつもりですが、「その問題は何が原因だったのか」「その改善は正しかったのか」などの検証をしてこなかったために、今後の展開に行き詰まってし

まったのです。この状況を打破するためにはどうしたらよいのかと考えていたところに大学院での学びの機会をいただけたので、本当に幸運でした。実は過去にも一度機会をいただいたことがあったのですが、その時は学びを学校に還元する自信がないという消極的な理由で辞退してしまいました。今思えば、「なぜあの時にやらなかったのか」と思わないでもないのですが、「屋久島は呼ばれた人しか行けない」と言われることがあるように、私にとっての大学院での

学びは今だったのだと前向きに捉えております…迷信と比べることではないですね。すみません。

まだ4月のオリエンテーションと合同カンファレンスの2回しか参加していませんが、既に多くの気付きを得ることができました。これから2年間、さらにたくさんの刺激を受けられるかと思うと、期待で胸がいっぱいです。皆さま、これからどうぞよろしくお願いいたします。

## 共に学ぶ ～探究の旅へ～

沖縄県宮古島市立平良中学校 前川 尚代 (まえかわ ひさよ)

これまでの実践を確認しながら、さらに生活環境の違う職場で働く先生方と語り合いそして学び合いたいと思うようになった。その理由として、これまでの実践はどちらかというと、一年一年で途切れてしまい、担当が変わればまた元に戻ってしまうという悪循環が起きているように思えてならないからだ。引き継いでいくためにはやはり、同僚性の構築や同僚性のある研究が必要だと感じている。

前任校で学年主任・研究主任・学力向上推進担当という大きな役割をさせていただいた。気がつけば、周りの教師が互いに学び合っているかどうかに、つい目がいくようになった。主体的で対話的で深い学びというワードにも慣れてきたが、私達教師も「共に学ぶ」姿勢であり続けなくてはならない。ひいてはこの姿こそが、子ども達の学びにもつながるのだ。国の動向で「学び直し」というキーワードがあるが、自分が変わるためにはまずは「自分が学ぶことだ」という点に、気づいた。

4月から宮古島で一番の大規模校に赴任し、約30年ぶりに吹奏楽部を任せられた。子ども達が互いに自分の考えを伝え合い共有しながら音楽を創り上げていく、またその過程も楽しむ大勢の子ども達を見て、私も心が弾む。

また、本校の生徒指導体制は、おそらく宮古島の中でNo.1(ナンバーワン)ではないだろうか。大規模

校が故に生徒指導が困難であると思われがちだが、全職員体制で生徒達に寄り添っている本校の体制を、宮古地区の全学校が模範にすべきだと考える。全職員が一つの方向を向いているのだ。朝出勤すると、職員室に誰もいなくなる。担任は8時頃には教室に入り、他の職員もそれぞれ学年エリアに行く。登校した生徒達に、「おはよう」「元気?」「朝ご飯食べた?」と先生の方から声をかける。どこの学校でも見られる光景かもしれないが、全職員が同じ行動をとっている。私もいつのまにか、鞆を置いて2階に上がることが、毎朝のルーティンになった。本校の合言葉には次のような言葉がある。まさにこれが真の「**さすが平良、やっぱり平良、それでこそ平良**」だ。

教職大学院入学前は「学び直しは若いうちに。若い先生の方が良かったのではないか。私で本当に良かったのだろうか」とネガティブ思考でいたが、今では引き返せない思いと、常にアンテナを高くそのセンサーを磨いていかなければならないと、引き締まる思いになり、今後は若手教員の後押しをしたいという考えに変わってきた。

教職大学院に入学し、月一実施の合同カンファレンスでは異業種の方と話す機会もあり、聴けば同じ悩みも多い。形は違うが「根」は同じだ。そこでは過去の行為や体験を解釈し深い洞察を得ていく。「その時にどのようなことを考え、どのように生徒に伝え

向き合ったか」を振り返りそして、互いの実践やこれからのビジョンについて語る。

学校種や専門性の違いを超えた学びの場が保障されていることが特徴だ。これからも、子ども達が目を輝かせて「音楽」に親しみ、「音楽」を愛し、心を耕していけるような「授業」を目指し、先生方と共に「協働的な学び」を展開していきたい。

素敵な先生達に囲まれて仕事ができる環境の中で、貴重な研修の機会・後押しして下さった関係各位の皆様、感謝です。

そして大学院の先生方、これから関わる全ての皆さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

子ども達と共に先生達と共に

探究の旅へ いざ出陣！

## 福井県立勝山高等学校 松田 奈々 (まつた なな)

皆様、はじめまして。ミドルリーダー養成コースM1の松田奈々と申します。福井県にはこの名字が多い地域があり、私はその地域の生まれでして、「マツダ」「マツタ」「マツタ」、3通りの読み方があります。私は濁点が付かない、促音でもない、一番発音しづらい「マツタ」です。小中高と同じ学年に「松田」が二人以上いたので下の名前と呼ばれることが多かった人生です。ぜひ皆様も下の名前と呼んでいただけたらと思います。

幼稚園の時、誕生日のお祝いで担任の先生から自分の手形を押すカードを作ってもらった記憶はありませんか。私は、社会人になる前に自分の部屋を大掃除していた際に発見したのですが、好きな食べ物は「リンゴ」、将来の夢は「ようちえんのせんせい」と書いてありました。リンゴは今でもまあまあ好きですが、こんなにも幼いときから先生志望であった自分に驚きつつも、先生という幼い頃の夢を叶えた自分をすごいなとも感心しました。

小学生の時は学校に行くとき新しいことをたくさん知ることができ、家に帰って学校での出来事を家族に話すと、うんと褒めてくれたことが嬉しくて、学校が楽しく、大好きで、多少体調が悪くても休みたくないと思っていたほどでした。高学年の時の担任は専門が社会科でした。授業中、教科書の内容だけではなく、関連した中学高校の内容を少し教えてくれたり、百カ国以上の国名や首都名を覚えて独自のテストを実施したり、実生活で役立つ様々な教養も教えてくれました。ある時は授業時間まるまる1時間、自分の

人生で面白かったエピソードを紹介してくれ、こんな「楽しい」授業をできるような社会の先生になりたいという憧れを抱き、この時から教員志望が明確化したと思われています。中学・高校と吹奏楽部に所属し、音楽の楽しさも感じていたときは音楽の先生になり、吹奏楽の指導をすることにも憧れました。様々な想いはありましたが、幼い頃から一番長く続けている習い事が「習字」で、周りのクラスメイトや大人達から自分の存在価値を認めてもらえたと実感したのが「書」であり、高校生の頃、進路を考えていたときに、自分に一番自信が持てる書道を強みにした先生を目指そうと決めました。

県外の私立大学に進学し、文学部で書道を専攻し、副専攻を様々な選択することで、小学校一種、中学校一種(国語)、高等学校一種(国語・書道)の免許、学校図書館司書の資格をそれぞれ取得しました。在学中は書写教育の魅力を感じ、小学校での教育実習も充実したという経験から小学校での採用を目指そうとしました。卒業後、福井県に戻った際、高校で国語の講師をするお話を頂きました。書写にも書道にも関われない、自分の強みを活かさないことに、最初は戸惑いでしたが、国語の指導の魅力も感じ始め、これも運命なのかもしれないと、高校国語での採用にシフトチェンジしました。講師を3年間経験し、無事教採に合格し、現在も勤めている勝山高校に国語の教員として採用となりました。吹奏楽部の主顧問、慣れない校務分掌、教材研究、担任の経験など、毎日は充実していましたが、目の前にある業務をこなすことで精

一杯になり、思い悩むことが増え、いつからか「楽しい」というキーワードが、どこかに隠れてしまったようです。忙しいと思いながらも、「楽しい」機会を自然と求めていたのか、校内外の研修に参加することはなるべく心がけていました。その中で、楽しい学校コンサルタントSecondの前田健志先生との出会いがありました。前田先生が最初のワークショップで参加者全員に「楽しいことはなんですか」と聞いた時、私は「寝ること」と答えていました。前田先生から、「なんで？」と聞かれて、「何も考えなくて済むので」と答えた時、「それって本当に楽しいの？」と、もっともなツッコミが入り、「楽しい」わけないじゃん、と不思議な気分になったことを覚えています。今となっては、「なんてことを言ってしまったんだ！」と大変悔やんでいるのですが、前田先生から学びを得るうちに、授業のあり方や生徒との向き合い方を再度考えるようになり、隠れていた「楽しい」が現れ始めたような気がします。

先述したように、大学では書道を専攻しており、そこでの学びは充実していたという満足感がありま

したが、本当は別の大学の教育学部で学びたかったという悔しさがありました。大学在学中お世話になった同郷の先輩が卒業する時、「地元の福井大学には教職大学院があって、私はそこでもう少し教育について学んでから先生になるよ」と聞いていて、私も機会に恵まれたらいつか目指したいとひそかに心に決めていました。昨年度、担任経験が一周し、副担任となり、これからの教員生活について考える時間ができました。その中で、今が大学院に行くチャンスなのかもしれないと悩んでいた頃、前田先生から「教職大学院おいで」というメールを頂き、進学を決心がつきました。

今年度、大学院進学と同時に、また新しく1年生の担任をすることになりました。今の私が「楽しいことはなんですか」と聞かれたなら、幼い頃の自分のように「学校での学び」と答えると思います。目の前にいる生徒達と共に、これからの出会いや新しく知る学びを、お互いに「楽しい」と思えるよう、様々なことに挑戦していきたいと思います。皆様、2年間、どうぞよろしくお願ひします。

## 福井市さくら認定こども園 山田 ゆみ (やまだ ゆみ)

初めまして、ミドルリーダー養成コースに入学しました山田です。現在福井市さくら認定こども園で勤務しています。自園の卒園児だった私は、保育者としてこの園に戻ってきました。園児時代から現在に至るまでたくさんの時をこの園で過ごしていることとなります。園はとても良い環境の中にあります。周りは自然も豊かで子ども達の日々の遊び場となる公園もたくさんあり、安全に歩ける道路も多く、買い物ができる場所も近くにあります。園では現在、活動センター方式・流れる日課・プロジェクト保育(探究活動)を軸にしています。プロジェクト保育を始めたことで園周辺の環境の良さに改めて気づき、地域との関わりを持ちながら活動する必要性も理解できるようになりました。子ども達の大好きな乗り物を頻繁に見に行くことも、必要なものをすぐに一緒に買いに出かけることも難しくないので。しかしそんな

風に子ども達が過ごせるようになったのは7,8年前頃からでした。

保育者として勤務し始めた頃はまだまだ一斉設定保育の時代で、発表会の役やマーチングの楽器なども担任が中心になって決めていました。受けもっていた子ども達が大きくなってから再会する機会がありましたが、いろいろと話をする中でこんな言葉が出てきました。「やりたくなかったのに勝手に決められたんだよな〜」「違うのやりたかったのに〜」と当時のマーチングや発表会のことを思い出していた様子は今でも忘れられません。今から7,8年ほど前に園長・教頭(当時の)らが中心となり少しずつ園が変化していく時代に立ちあいました。当時は職員の戸惑いがあったり、保護者の理解が追いついていなかったりなどと様々な渦の中にいましたが、私自身もかたい頭をほぐしながら少しずつ子ども主体である

ことの面白さを感じることができるようになってきました。まだまだその道のりの途中ですが、今の保育であれば、子ども達がいつか園の思い出を語る時にはきっと…とようやく少し自信が持てるようになってきたところです。

そうした園改革の中心であった園長・教頭（当時の）をはじめ、これまでさくらから4人の職員が教職大学院に通い修了しました。昨年私に教職大学院のお話が来たときは、有難くもはじめはお断りするつもりでした。しかしある日、大好きな榊さん（元アナウンサー）が出ていたテレビ番組が目にとまりました。SDGs 関連の番組で、海岸でマイクロプラスチックのゴミを砂の中から拾い集めていました。30分かけて集めたものがたったこれだけ…とざるの中身を見て愕然とする榊さんの姿が映し出されました。榊さんは暫しの無言の後に「これが、知るということなんです」と一言伝えたのです。このことが気持ちの切り替わるきっかけの一つになりました。私にもきっとまだまだ学ぶことがある。そしてこれを皮切りに、なぜか目にとまるようになった様々な情報や出来事により、やってみたいなという前向きな気持ちに傾いていったのです。

こうして学ぶ気持ちが持てたものの、通う前には不安もありました。自分の中にある考えや思いをうまく言葉で表すことが出来ないことがもどかしく、教職大学院に行って語る事ができるのだろうかかと心配でした。以前、公開保育のグループ討議で悩みはあるかと質問されたことがありました。何か少し答えたものの、それ以上すぐには出てきませんでした。自分の保育には悩みや課題が少ない。というより、あるはずなのに見つけられていないのだなと思いました。なぜ見つけられないのか？子ども達には振り返りを取り組んでいるのに、自分自身の保育の振り返りはあまりしてこなかったことが原因だと思いました。自分の保育を言葉で上手く語れないことにもつながっていると思います。

最後に。「幼児期にはたっぷり時間があるのよ」という言葉をかけてくださった方がいましたが、確かにカリキュラムのある小学校などとは異なり幼児にはたっぷりの時間があります。同時に保育者にも子ども達の興味・関心に寄り添う時間がたっぷりあるのです。その日々の記録を大切に、それを元に教職大学院で多様な方々と語り合いを重ねながら自身の保育を振り返り生かしていきたいと思っています。これからよろしく願いいたします。

## 勝山市立勝山北部中学校 Lauren Nichole Hartford (ハートフォード・ローレンニコル)

Hello, please call me Nikki (ニッキー). I'm looking forward to meeting you. We are all on a journey. At different parts, from different starting places, with different destinations. But I'm glad that our paths have all crossed at this pivotal point in our journeys.

My journey began in Colorado and then to Florida, USA. My parents supported me in all of my curiosities. They inspired me to always keep an open mind and heart. When I was young, the world outside our own called to me. My path was to become an astronaut. Then in junior high school my first fork in the road emerged. I decided to

change to the path of defense attorney, to bring justice for those innocently imprisoned. But in my first year of university another path came to light. And this one called to me just as passionately as the astronaut one had. This path led to psychology, which had its own branches that I would veer onto over the years. First with forensic psychology, then aerospace psychology, and finally therapy and counseling.

In the end I found the path that felt right for me. But all the while right alongside the path of education was following, waiting for me to cross it. My mother was an educator and instilled in me

the importance of knowledge and a love of learning throughout life. Even though I had various experiences teaching music in school, I never considered it in my future. In university I volunteered to teach English to international students and was an Undergraduate Teaching Assistant for Personality Theory and Research courses. It was at this time that I also discovered the JET programme (the Japanese Exchange and Teaching programme) and realized that a path I always wanted to take could become a reality.

My grandma Yoko had shown me about Japanese culture, history, and art when I was a child. My interest in Japan was constant throughout my life. I always hoped to visit Japan sometime. Now I had the chance to live and work as an English teacher there; to experience this beautiful new place for myself. The two paths of education and Japan had crossed and become one.

Life is interesting. These paths were nowhere in my sights before. I had never considered teaching for a career. And I thought that trip to Japan would be a dream vacation for the far future. But some choices, which I previously perceived as obstacles, lead me here. In university I wanted to study American Sign Language for my required language credit, because I thought it would be the most useful. But the class size was limited so I had to choose a different language to study. I chose Japanese. And that is where I learned of JET. Without that choice, my life's journey would look incredibly different. I wouldn't be where I am or who I am today.

From then on I knew the path I wanted to take and was determined to reach it. I took extra classes to obtain a Teaching English as a Foreign Language Certification (TEFL). In those courses I learned not only about teaching English, but about teaching as a whole. And the importance of good

educators for students and in turn the future of society. After university I became an educator at Cox Science Center and Aquarium. I created and taught various scientific lessons to a wide range of educational ages and levels. I was also made the head of the Early Learning Department, where I was in charge of the curriculum for the classes of children ages 6 months to 3 years old. I could start instilling the importance of education to help these very young children begin to grow their own confidence and curiosity. I am always learning and try to encourage students in their love of learning, too. With my background in psychology I understand that creating a space for students to feel curious and open-minded, open to making mistakes and learning, and fully supported is essential to growing their mental well-being, self-confidence, and knowledge.

After 3 years the next path started in my journey, teaching in Japan. I had never lived abroad before and was nervous of course, but I was also incredibly excited. I had no expectations. I was ready to experience a new way of life, meet new people, and learn new points of view. I planned to stay at least 2 years, and then decide from there. Now, almost 4 years later, I feel that Japan really is my home. After countless unforgettable experiences, various community involvement, building a life with wonderful people, and finding satisfaction working in the education system, I have decided to continue creating my future here in Japan.

My passion, fulfillment, and drive to become a helpful counselor in the future and a useful educator now come from the same goals. To show people that they can do anything they put their minds to. To create environments that facilitate and encourage genuine learning and growth for all. And to help people build self-

confidence through knowledge. These concepts not only benefit the individuals, but also benefit society and the future. Through the DPDT I wish to learn about diverse perspectives on education, their systems, and how to successfully implement these methods from fellow educators. I also hope to share my own ideas and perspectives with others on these matters. Through this collaboration we can help each other build brighter societies in Japan and in the world.

Through my life so far I have learned many lessons. One of the most important being to always keep an open mind and heart. New paths will arise throughout our lives. Some we plan for. Others are surprises. If we keep an open mind and heart, and stay curious, we will end up right where we are meant to be. I'm glad my journey has led me here to learn from and with all of you in the DPDT.

Thank you. Let's learn and grow together!

よろしく願いいたします。

### 勝山市立勝山中部中学校

## Juan Florencio Santamaria (サンタマリア・ファン フロレンシオ)

どうもお初お目にかかります。今年4月から連合教職大学院に入学させていただきましたサンタマリア・ファン・フロレンシオと申します。以後、お見知りおきを。私は福井市役所に勤めて、連合教職大学院ではミドルリーダー養成コースに所属しております。

アメリカ合衆国のカリフォルニア州からまいりました。10歳の時、インターネットでどこか遠い国から出た曲に遭遇しました。それはジャパンという国からきたと後で知って、その曲は浜崎あゆみの「Trauma」と林原めぐみの「Give a reason」でした。よりもよってJポップで人生が変わるとは思わなかったけど、二人の歌声が綺麗というよりもその言語自体が綺麗で魅了されました。

経済的な理由で短期大学を通い始めて、歯科医師ルートを進みながら、日本語の授業も通い始めました。授業では授業らしき勉強をして、宿題に加えてニコニコ動画の「うたってみた」生放送聞く・読む練習等しました。そもそも歌を聞いた影響で勉強し始めたから歌う人を見てするのっていいんじゃないと適当に理屈を付けて、アメリカの西海岸の朝4時に起きて日本からの生放送を見逃さないようにしておりました。こんな事して、意外と上達できました。

短期大学からカリフォルニア州立大学フラトン校に転学して、専門を日本語に変えて本格的に勉強し

はじめました。日本からの留学生ともなかよくして、お互いの言語勉強に付き合っ、私は言われました。「サンタマリアの教え方ってめっちゃわかりやすくて上手だね。先生になれば？」と。その些細な一言によって私の心の中に先生になりたいという願望の種が植え付けられました。でも、日本語と教える事の合わせた仕事なんてないと思ひ込みました。

2015年、大学から卒業する前に、日本語部部長のおすすめを受けて、私はフラトン市と福井市の間で結ばれた姉妹都市友好プログラムに応募して、福井で働くようになりました。福井市役所に入って、主になる仕事は幼稚園、保育園、小学校の中学年に訪問して、児童達に英語の楽しさを遊びで伝える事でした。2018年、私に天使が舞い降りました。その天使は私に「よかったら、学校教育課に異動して英語助手になってみないか。」と言いました。領けばALT（英語助手）に任用されて、今にいたる。

ALTとして上達するには自分で研究するしかありません。指導主事訪問がないし、講座や講義等に参加するチャンスが少なく、私はまた独学して、今回は教育的な研究、教える技術についての本、インターネットに上げられる現役教員が語るエピソードを色々参考にしてまいりました。なので、連合教職大学院に入るチャンスが来たと知って、覚悟を決めて志願しま

した。今から2年間ごひいきご鞭撻のほどよろしく  
お願い申し上げます。

## 勝山市立勝山中部中学校 Shana Marie Wolff (ウォルフ・シャナ マリー)

初めまして。今年の4月から福井大学連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学しました。私の名前はシャナ・ウォルフです。シャナと呼んでください。6年間勝山市立勝山中部中学校のALTとして働いています。5月から勝山市立勝山南部中学のALTも務めることになっています。アメリカのワイオミング州から来ました。

I received a Bachelor of Science in Geology from the University of Wyoming (2014) and a Master of Science in Geoscience from the University of Arizona (2017). My home state of Wyoming is large, with many mountains, animals, and nature. Growing up hiking and camping, I was driven to understand the landscapes around me. I wanted to understand why and how the mountains came to be and where they will eventually go. The earth is a giant puzzle, and I love to solve puzzles.

Not only was I was entranced by the landscapes of my youth I was also curious about other cultures. Specifically, I have always had a place in my heart for Japan. My first exposure to Japan was when a Japanese student teacher visited my kindergarten class. She showed us pictures of her family home, taught us basic greetings, and opened my young eyes to a new world. Every time I was presented with the opportunity to go to Japan, I took it. I was in Junior High School when I first came to Japan on a two-week tour with other kids my age. I came again in High School, and twice in college with various travel programs and study abroad opportunities. It is during college that I first learned about the JET Programme. The JET Programme gives recent

college graduates the opportunity to live and teach in Japan for a few years.

The first time I taught was during my time as a graduate student. I was offered undergraduate level laboratory sections to teach as a teaching assistant (TA). Some of my best memories were of my students telling me how much they enjoyed my class. Even if their major was not geology, they often told me how I helped them understand the material and made the class enjoyable. From this experience I knew I could be a teacher.

In 2017, I came to Japan to teach with the idea of staying only a year or two as a cultural sabbatical while gaining more classroom experience. In the beginning I focused on introducing my culture, helping my team-teacher JTEs (Japanese Teacher of English), and making English fun. Six years later, I am still in Japan and am a private hire ALT by Fukui Prefecture. I have had the enormous pleasure of working with amazing teachers at my school. It is with their support and years of working together that I have grown as a teacher. Now I try to work with my JTEs to make more engaging lesson plans that are balanced between textbook, grammar practice, and activities with situations for the students to generate original content using what they have learned.

I want to invest in becoming a better teacher for my students, co-workers, and community. I decided to pursue the Middle Leader Course at the University of Fukui to help me

achieve my goals. I am excited for the unique opportunity to connect with many teachers and exchange ideas. I want to grow together with my

new cohort and support each other to achieve our goals. よろしくお願ひします。



## インターンシップ・週間カンファレンス報告

### 対話に向き合う

授業研究・教職専門性開発コース2年 / 福井市明新小学校 酒井 夏瑞

大学院の学びと長期インターンシップも2年目となった。昨年度と同じく、今年度も明新小学校でインターンを行っている。インターン先は同じだが、変わったこともある。まず、昨年度よりインターンの回数が増え、学校組織の一員として子どもたちや先生方とのかかわる時間が増えた。昨年度は週1回であったが今年度は週2回となり、不登校児童の支援や学校行事のサポートなど、学級以外の児童ともかかわらせていただいている。今年度もインターン生という立場を生かしながら先生や子どもたちと積極的にかかわってきたい。

そして、昨年度と比べて大きな違いを感じているのが配属学年の違いである。今年度はクラス替えなしの6年生の学級に配属された。担任の先生も持ち上がった。4月時点でのクラスの状態は、昨年度かかわっていた4年生の学級とは異なる。昨年度の学級はクラス替え後ということもあり、先生と子どもたちで学級を作っていく状態の中での見取りだった。今年度の学級は同じ空間で過ごすことが2年目になるため、学級の中で、そして学級を超えてさらに成長していく子どもたちを見届けることになるだろうと感じている。また、学年が2つ離れるだけで子どもとの距離感が大きく変わることに驚いた。今年度も

一人の人間として子どもや先生方とのかかわることを通して、私自身も子ども達と共に成長していきたい。

今回のタイトルを「対話に向き合う」にした理由は自分自身が2ヶ月間最も向き合ったことだからだ。今年度も金曜カンファレンスにおける運営やファシリテーション、インターンでの子どもとのかかわりや不登校支援などで対話をする機会が多い。そのような実践の中で気づいたことは、私はいつも相手が伝えたいことをただ受け止めるだけの「聴きっぱなし」になっているということだった。人と話している時に、私自身は「相手が考えていることは何だろう」「何を伝えたいのだろう」と思って話を聴いていく。相手の思いや伝えたいことを引き出そうとはするが、自分の思いを伝えようとは考えていただろうか。「こんなこと言うと相手を傷つけるのではないか」「どう思われるだろうか」と考えてしまい、相手の言葉を受け止めるだけで自分の思いは隠してきた。それは対話と言えるのだろうか。答えはノーだろう。そのような対話では、いつか相手との間にズレが生じるだろう。聴くことが大事だと思っていた私は、相手に嫌われたくないがために「伝える・訊く」を疎かにしてきたのだと気づいた。

今日のインターンで、体育の時間にリレーの順番が入れ替わったことで子ども達が混乱し衝突が起き

た。人数合わせのために順番が入れ替わることは起こりうる話だったのだが、衝突が起きてしまった。授業後に泣いている Aさんと担任の先生が話をし、その場が収まったと思ったのも束の間、クラスに入るとムスッと腹を立てているような表情をしている Bさんを見つけた。私は、これは話を聞かないとまずい、と思い授業後に話を聞くことにした。最初の方は、感情的に責め立てるばかりで Bさんが伝えたいことが見えてこなかった。本当に伝えたいことはこれだけなのだろうかと思いながら聞いていく。段々と話していくうちに、Bさんは誰かを責めたいわけではなく、自分がイラッとしたことをその場で口に出してしまったことで周りも同じように冷たい言葉を言い始めてしまったことに対する後悔と反省が根底にあることが見えてきた。私自身の思いも伝え、お互いの

思いを言語化し擦り合わせていく中で、最初は氷山の一角しか見えなかったものが水面下にあるものまで見えてきたことを実感した。これが「対話」なのだなと思った瞬間だった。そして、対話がなければ支援は成り立たないな、と感じた1日だった。

Bさんの本当の思いに気づくまで時間がかかったように、対話を深めることは大変時間がかかるということにも気づいた。しかし私は時間がかかっても対話を大事にしていきたい。これからは「聴きっぱなし」で終わるのではなく、相手の言葉を受け止めた上で「伝えること」も意識しながらやっていきたい。今年度も多様な人とかかわる時間を大切にしながら、対話と向き合っていきたい。

## 他人の思考を理解する

授業研究・教職専門性開発コース2年 / 福井市安居中学校 八十川 竜馬

教職大学院での学びも2年目を迎えて、インターン先こそ変わっていないものの、全体的に環境が大きく変わった。毎週金曜日の午後から開かれている金曜カンファレンスでは、運営側に回ったことによって、1年目以上に多くのことを考えるようになった。以下は2年目になって感じた金曜カンファレンスの中での学びと私自身の心境の変化である。

まずは金曜カンファレンスでの学びについて述べる。金曜カンファレンスでの学びは複雑で簡潔に一言で言い表すことはできないが、2年目から新たに感じたものがある。それは「他人の思考を理解すること」である。こう見ると当たり前だ、そう感じて当然の言葉かもしれない。以前から私も普段の周りの人の思考は理解しようとしていたし、他人を理解できてないと感じることもあまりなかった。しかし、金曜カンファレンス運営側の一員として会議を進めていくうちに、以前の考えの甘さに気づかされた。会議中、その場面で考えなければならぬこととは少しずれた部分で、会議に参加しているメンバーが頭を抱える

シーンが多いように感じた。それだけでなく共通理解を大切にしていって進めてきたはずなのに、いつの間にかお互いに意見が大きく食い違う状況に陥ることもあった。そして、実は他人の思考を理解できているようではできていなかったのではないかと気づかされた。

そこで会議中に今まで以上に周りが何を考えているのか、どこでみんなの思考や認識にズレが起きているのかを本気で考えるようになった。すると皆がふとした時に使っているワードにズレがある場合や、難しい課題や議題に全力で向かっているうちに、新たな課題や他の重要な視点に気づいて本来の軸から逸れてしまう場合、その他様々な要因があることが多少見えてきた。見えてきていながら会議中に私も皆と一緒にズレていってしまう。どうしたらより全員がクリアな思考で会議を進められるのだろうか、そんな悩みを抱えつつ、会議全体を見ようとしながら臨めたことは私の大きな学びになったと感じている。このように会議に悪戦苦闘していくうちに、より

周りを見ようとする意識が芽生え、少しずつ成長できているのではないかと感じている。

ここまで述べてきたことが今年度特に感じている学びである。最後に、今年度から変化したと思う心境について述べていく。そもそも会議のズレが気になったことの背景として、「分からないを大切にしたい」「分からない時に分からないと言いやすい環境を作りたい」という今年の M2 全体としての思いがある。この思いは、「分からない」と感じてそれを表に出せずに徐々にいけなくなった、という声がかきつけとなっている。ただし、ついていけないと言っていた人とカンファレンス等で話していると、いつ

も私は彼らの視点や思考から新たな刺激を受けていた。去年からの心境として、その人の存在がとても貴重で、私の学びにおいてとても有難い存在だという思いだけがあった。一方で、相手視点に立った時に果たして私は学びを深める存在であったのか、と考えると正直なところ自信が持てない。相互に良い影響を与えながら、学びを深め合っていく、そのような関係を持ちたいというのが個人的な今の心境である。特に今年度は集団としての教職大学院の学びを考える立場でもあり、今の M2 が大事にしていることを全力で突き詰めたいと考えている。



## ミドルリーダー/マネジメントコースだより

### 探究と魅力ある学校づくりに向けて

ミドルリーダー養成コース2年 / 岐阜聖徳学園高等学校 水谷 雅典

教職大学院で学び始めて、あっという間に2年目へ突入した。カンファレンスやラウンドテーブル、集中講座などを通じて、生徒や学校がよりよくなっていくために必要な実践のヒントを得たり、新たな可能性を見出せたりすること、また、それらを実践することによって新たな学びがあるなど、日々実践を通じて学ぶことができている。カンファレンスなどでお話しした先生の数だけ新たな可能性を見出すことができ、その中から本校の現状と比較して、今できることに挑戦できることはとても有難いことだと感じている。

高校生の総合的な探究の時間においても同様の学びの形があると感じる。昨年度、探究の時間で生徒が課題設定をする際、新聞から気になる記事を見つけ問題を抱え、そこから課題を設定するという方法をとった。すると生徒は、「人口減少」や「少子化」

等、高校生では解決が難しい大きな問題を取り上げることが多く、新聞記事を使って課題設定をすることは困難であった。唯一スムーズに課題を設定することができたのは、県内高校生が規格外食品について取り組んだ記事を目にした女子生徒2名であった。その女子生徒2名は「私たちが同じようなことをしてみたい！」から探究がスタートし、積極的に地域の方と繋がる姿が見られた。私は、新聞記事から課題設定しようとする、高校生では解決が難しい大きな問題が出てくることに悩み、別の方法で課題設定をする必要性を感じていた。

しかしつい先日、福井新聞が毎週日曜日に探究特集をしていることを知り、1年分の記事を読むと、高校生がバラエティ豊かに課題を設定し、活躍していることを知った。その時、新聞記事を使って課題設定ができた女子生徒2名と、できなかったグループに

は決定的な違いがあったことに気が付いた。それは、女子生徒 2 名は、他校の高校生が実践した具体的なものを参考に、自分たちなりの形で実践しようとしていた。そのため、どうなればいいのか、自分たちがどうしたいのかが具体的に描けていた。一方、他のグループは、問題があることは分かるが、自分たちに何ができるのか、どうなればいいのか、自分たちは何がしたいのかを具体的に描くことができない状態であった。「既に行われた活動を真似ることはどうなんだ…」と思う読者もいるだろうが、空間や時間が違えば、探究が全く同じように進むはずがなく、その地域に合わせたオリジナリティある探究へ発展していく。さらに、既に行われた探究活動が良いものであればあるほど、尚更拡大・継続することも十分に意味があると考え。要するに、「他県(校)の高校生は〇〇をやったみたいだ(ずっと前に岐阜でこんなことがやられているんだ)。これをやってみたいな!役に立つか?同じようにできるかな?」と、これまでの探究活動を参考に、自分の状況と時間的・空間的に比較することは、課題設定や活動を進める中でも大変有効的だと考える。

教職大学院での学びと総合的な探究の時間における生徒の学びを比較すると、立場は違えど、似た構造で学んでいることに気が付く。どちらも自分の実践だけでなく、自分以外の実践も知る中で、今後に繋がる情報やヒントを得ながら学んでいる。そして、自分自身や自分の学校・地域と、時間的・空間的に比較しながら学びを深めている。

さて、昨年度は私自身が生徒の探究活動をサポートすることに徹していた。しかし、今年度入学生からは学年全体で本格的に探究活動がスタートするため、

学校として取り組んでいけるようサポートをすることが今の私の役割である。既に市役所や県庁などへ探究活動への協力依頼はしているものの、更に身近な視点で取り組めるよう、自治体とも連携を密にしながら生徒の課題発見のサポートをしていく必要がある。自治体の催し事や、それに関わる課題についてインタビューをしながら、探究課題の設定に向けた準備を進める。また、探究は教員にとって慣れない面もあり、戸惑いが生じることが予想される。そのため、本校が ICT 機器導入時に、職員の積極的な活用が思わぬ速度で浸透したノウハウを活用し、「探究通信」や任意で参加できる放課後の校内研修を実施しながら、少しずつ探究が充実していくようにしていく。

最後に、これから少子化が進む中で、私学として力強く生き残っていくための策も必要である。そのためには魅力ある学校づくりが重要である。魅力ある学校づくりとは、進学実績が重要な要素であることは確かであるが、それだけでは不十分である。また、探究が進むことだけが魅力ある学校へ繋がるというわけでもない。他校の実践を伺うと、地域協働による学びや成果を中学生へ紹介したり、高校同士の交流を行ったりしているところがある。また、部活動の強化、大学との連携、海外留学生との交流、長期休みの海外留学、各種コンテスト・アワードへの応募などを積極的に行っている学校もある。いずれにしても、生徒が様々な場面で挑戦できる場を設けていくことが重要であると考え。一人で短期間に手広く行うことは不可能であるが、今年度は本校の探究の基盤づくりと同時に、海外留学に関することも進めていきたい。

## Becoming a Better (Middle) Leader

ミドルリーダー養成コース2年 / 福井県立高志中学校 Nathaniel Venezuela Teocson

I can confidently say that my experiences in the Department of Professional Development of Teachers (DPDT) at the University of Fukui have

been a transformative experience for me. The monthly conferences and intensive sessions during the summer and winter breaks have provided me

with many opportunities to expand my knowledge and improve my teaching practice. I feel that my way of thinking has greatly changed over the past year, and I am grateful for this growth.

One of the most significant benefits of this program has been the opportunity to connect with teachers whose experiences and backgrounds greatly differ from mine. I have been able to learn from fellow teachers of various subjects, not only those who teach English, and working in environments where I have had no first-hand experience, such as in nursery and elementary schools. Through the many group discussions during the monthly conferences, Round Tables, and Intensive Sessions, I have gained a deeper understanding of how important discussions are.

When I first entered the university, I did not have any particularly grand aspirations or research themes already in mind. My main reason for entering the university was simply because I thought it would help me in being able to continue my career as a teacher. As I progressed through my first year as a graduate student, I have slowly been able to form a vision of what kind of teacher I aspire to become; I am challenging myself to be a teacher who is not afraid to try new things in the

classroom and create a learning environment where the students feel comfortable expressing themselves and are encouraged to learn from their mistakes.

Despite my growing understanding of what I hope to achieve as a teacher, I still do not have a grasp of what “Middle Leader” means to me. As I enter my graduating year, I would be lying if I said I am not feeling anxious about how my Long-Term Practice Record will turn out; having to encapsulate my whole teaching career, experiences, and goals within a unifying theme is daunting. However, I have confidence that with the guidance of my supervisors and colleagues, I will come out of this program as a better teacher.

My experiences in the DPDT have been invaluable. I am grateful for the opportunities to connect with teachers holding different perspectives, expand my knowledge, and improve my teaching practice; these and many factors have shaped me into a more reflective and open-minded educator. While I am still uncertain about my future as a teacher, I am excited about the possibilities that this program has opened up for me.

## 対話を軸とした学びを広げる

学校改革マネジメントコース2年 / 岐阜市立草潤中学校

中今 純一

4月7日、入学式・始業式での一場面。司会をしていた私は新入生に対して、「草潤中学校に入学したみなさんの今の気持ちを、この場でお話ししてくれる人はいませんか？」と投げかけました。すると、3年生の生徒が手を挙げて話してくれました。「僕は小学校から今日までずっと不登校でした。中学1年生から草潤中学校に入学したかったけれど、なかなか入れなくて、でもやっと草潤中学校に入学することができて、今はとてもうれしい気持ちでいっぱい

す。だから、あと1年間の中学校生活を楽しんで、もう一度頑張りたいと思います。」これまで不登校であった生徒が、大勢の人たちがいる中で、自らの過去の苦しみと新たな決意を堂々と話す姿を見て、涙がこみ上げてきたと同時に、そんな生徒たちの思いに全力で応えたい！と改めて思いました。

今年度から教務主任と研修主事を務めることになりました。研修主事は、今年度から岐阜県が各学校に

位置付けた校務分掌です。教員免許更新制が廃止になったことを受け、校内研修の充実を図ることが研修主事の役割の一つです。本校では昨年度から毎朝15分間の「アサカツ」という研修を行っています。生徒についての交流やICT活用など、先生方の学びのニーズを大切にしながら、研修内容を組み入れています。その一つに、福井大学教職大学院での学びを取り入れた「草潤スタッフラウンドテーブル」も週に1回行っています。たった15分間だけですが、先生方と向き合っただialogができる貴重な場となっています。ラウンドテーブルによって同僚性が高まり、先生方からも概ね好評です。今年度は先生方だけでなく、生徒・保護者・地域の方も交えて、ラウンドテーブルができないか模索しているところです。そして、長期実践研究報告に向けて、実践のテーマを明確にしていきたいと思っています。今のところ、キーワードは「対話」です。対話はどんな学びを生み出すのか、対

話によってどんな成果があるのかなど、学びの成果を可視化する必要があると思っています。そして、対話を軸にした取組が子どもたちにどのように還元されていくのか追究していく予定です。

令和3年度に開校して以来、本校のコンセプトである「学校らしくない学校」をつくるために、試行錯誤を重ねてきました。開校3年目の今年度は、これまでの試行錯誤を一つずつカタチにしながら、職員・生徒・保護者・地域の方との対話を重ね、「ありのままの君を受け入れる新たな形」を創っていきたいと思います。

入学式で話してくれた3年生の生徒と同じように、私の福井大学教職大学院での学びもあと1年間。多くの先生方との対話を楽しみながら、学びを深めていきたいと思っています。

## 互いのことを知り、つながるコミュニティ

学校改革マネジメントコース2年 / 滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課 村地 和代

「今、教職大学院で学んでるんです」と、伝えると、大半の方が、驚きの表情を浮かべながら、そして気の毒そうに「え！？仕事も忙しいのに、大変でしょう」と、決まり文句のごとく返答される。

確かに、入学当初は、仕事と教職大学院を両立することができるだろうかと、私自身も不安に思っていた。しかし、教職大学院での学びは、間違いなく仕事に反映されている。

令和4年度より滋賀県は、文部科学省委託の「幼保小の架け橋プログラム事業」を実施している。本事業は、施設タイプの違いを越えた幼保小接続を推進するためのモデル事業である。本県としては、県独自の幼保小接続の事業である「学びに向かう力推進事業」との連携を図ることで、指定校園だけでなく、県内の取組をさらに充実していこうと考えている。私は、その担当者であり、しかも、幼稚園教育担当は、私一人である。国自体も本事業を模索しながら進めており、

どのように本事業を展開していくべきなのか悩む私の背中を支えてくれたのは、教職大学院での学びである。

本事業の委託を受ける前に、事業計画書を立てたが、これは言わば理想的な計画であり、理想と現実が大きく異なっていた。実際に、本事業のモデル校園のベクトルがそろうまでには、いくつもの大きな壁があった。モデル校園は、小学校、幼稚園、認定こども園、保育所と公立私立問わず様々な施設類型で構成されており、保育・教育の方針は異なっている。また、校園の状況は様々であり、事業に対する体制や想いも違う。さらに、この事業は、管理職や担任、コーディネーター、市の教育委員会担当者、幼児課担当者等、多岐にわたる立場の方が関わっており、それぞれの想いが交錯していた。

壁にぶち当たるたびに、カンファレンスで自分の実践を振り返り、語り省察し、次の実践への見通しを

もつというサイクルを繰り返した。自分の実践を語るということに、最初はとてもとまどった。しかし、グループのセッションは、それぞれの実践を肯定的に受け止め、非常に和やかな雰囲気が進められた。心がほぐれ、自分の気持ちを整理しながら、語ることができた。また、同じグループの先生方から、それぞれの立場から感想や意見がもらえたことが大変ありがたかった。グループの先生方は、校種、年齢、経験、立場が様々である。カンファレンスでは、こうしたらよいのではというような答えを出し合うのではなく、それぞれの考えを語り合うということが新たな学びであった。また、先生方の実践をお聞きすることで、その実践と自分の実践との共通点や相違点から学びを得られた。これは、幼保小接続とも共通する。幼保小接続＝架け橋期のカリキュラムを作成することではない。そのことを重視するのではなく、互いのことを「知る」こと、「語る」こと、そして、互いを認め合い取組の良さを取り入れる「受容」の姿勢。このこ

とが、「協働」へとつながってくる。人と人がつながることが幼保小接続の土台となる。とはいえ、そのつながりを育むためのコーディネートがどのくらいできているのかについては、反省することが多々ある。これについても、グループセッションや教職大学院の先生方の姿から学んでいきたい。

教職大学院では、対面とオンラインと選択できるが、入学当初から私はできる限り対面で参加しようと決めていた。そのおかげで、回を追うごとに、知合いが増え、つながりができたことも教職大学院での学びの魅力の一つである。つながりができたおかげで、福井県の美味しい食情報も得ることができた。本当にありがたい。

教職大学院での学びも2年目、「幼保小の架け橋プログラム事業」も2年目に突入する。自分自身が組織、校種、先生方の架け橋の役割を果たすことができるよう、人とのつながりを大切に進めていきたい。



## 4 月月間合同カンファレンス報告

### 自他と比較し成長を感じる

授業研究・教職専門性開発コース2年 / 福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

加福 智哉

まず、4月月間カンファレンスを迎えるにあたり、なにか月間カンファレンスが「久しぶりだな」という気持ちになったり、「そういえば4月は2日間あったな」と懐かしさがよみがえってきた。私はB日程に参加した。私のメンターの先生がA日程に参加していたため、「どうでした？」と4月の月間の雰囲気を聞くことができた。その時に、「去年レポートどのくらい書いた？」と聞かれた。私は全然思い出せな

かったので、昨年度書いた4月の月間のレポートを自分で見返した。この読み直した瞬間が次からの話につながってくる。

2日間を終えて、「疲れたな」という気持ちと、達成感があった。久しぶりに達成感を味わい、この達成感はどこから来たのか自分の中で不思議に感じていた。やり切った気持ちなのか、語り切った気持ちなのか、それとも、やっと終わったという解放感

なのか、そんな思いが混ざったような感じだった。そんな月間だったが、去年とは違い、自分の成長を感じた月間でもあった。まず初日、私は去年と同じ資料を読んだのだが、見え方が全く異なっていた。去年は「この資料読んだことあるよ」となにかつまらなさそうに読んでいたのだが、今年は自分の経験も増え、具体的な学校現場をイメージしながら読むことができたとともに、教師に求められている資質・能力は、子どもに求められる資質・能力ととても似ているなと感じた。これは去年の私にはなかった新しい視点である。

1日目の終わりから、2日目の午前にかけて長期実践報告書を読み進めていった。私は昨年度 MVP をとられた揚原さんの長期実践報告書を読んだ。私が M1 の時に揚原さんが M3 で大学院におり、一緒に話す機会も多く、揚原さんの長期実践報告書も持っていたため、この機会に読んでみようと思ったことがきっかけである。この長期の読み方も去年の自分とは全然異なっていた。去年の自分は、長期実践報告書に書いてあることをただ淡々とレポートにまとめ、書いてあった事実だけをその後の報告会でも伝えていた。これは去年の私が書いた4月月間のまとめを見て分かったことである。それを見て、私は「全然面白くない」と感じていた。このようなことから、今年は、揚原さんが行ったことの背景や、揚原さんという人物像を思い描きながら読み進めることにした。また、

そこに自分の経験も踏まえながら自分の考えも書いていき、まるで自分が揚原さんの立場になったように考えていた。このような読み方や、レポートの書き方になったのも私の1年の成長であろう。

最後に、私が1番印象に残ったこととして、月間の一番最後に行ったグループセッションがある。私はこの時、本当に何を話せばいいのかわからなかった。しかし、気づいたら15分間ずっと話していた。これも私の成長だと感じることができた。同じグループに M1 のストレートマスターがいて、その子を見ると、自信がなさそうに、何を話せばいいのかわからない姿があった。その姿を見て、私も「そういえば去年の僕の姿にそっくりだな」と思い見ていた。そう考えると、私はすごく話せるようになったなど、そう感じる場面であった。

2日間という長いようであつという間の時間であったが、他者と自分を比較したり、今の自分と過去の自分を比較したりしながら、少しずつ自分のことを自分が理解し始めたそんな気がしている。一番最初の話に戻るが、私が昨年度書いた4月の月間のレポートを見返したことで、今回の月間への向き合い方が大きく変わった気がしている。このように記録に残し、記録を見返し、そこから自分なりに良くしていく。記録・省察の意義をととても感じる月間カンファレンスであった。

## 2年目をどう過ごすか

授業研究・教職専門性開発コース2年 / 福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

松浦 妃南

2年目になって初めての合同カンファレンス。4月の合同カンファレンスは、「3つの種」「教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」「長期実践研究報告を読む」の3本立てであった。流れとしては昨年と同じであったが、同じ議論の繰り返しではなく、自分自身も昨年と違う視点も得られたとても充実感のある時間となった。

この合同カンファレンスに参加するにあたり、まず3つの種のレジュメの作成に取り掛かった。ここで求められるのは実践的な自己紹介である。ただの自己紹介ではない。昨年の自分の取り組みを振り返りながら、今年新たに何に取り組みたいのかをじっくり考えた。考えるにつれ、昨年の自分はこの3つの種に何を書いたのかが気になり、見返すことにし

た。すると、教職大学院で取り組みたいこととして、次の二点を挙げていた。

#### ①授業技能の向上 ②研究力の向上

どちらも自分に足りない力を伸ばしたいという思いからであった。これに関しては、今現在の私の思いと変わらないものである。ただ、1年を通して、向上させるために取りかかることが具体的になっていることに気付いた。授業技能を向上させるために、昨年、授業を見せて頂いた経験や授業をした経験から、子どもの学びを見取る難しさを実感し、「授業を見る」ことについてさらに追及したいと考えるようになった。また、研究力を向上させるために、昨年度研究してきたものを実践という経験から、また新たなリサーチクエストが得られ、それに向けて研究を進めたいと考えている。この他にもさらに新しく、他者と語り合う中でこそ学びが充実しているものになることを実感したことから、このような語り合いが生まれるにはどうしたらよいのかという疑問も生まれた。このように、3つの種の作成、そしてそれを語り合う時間を通して、私の2年目で取り組みたいことを少しずつ明確化することができた。

次に、教育改革の展開の吟味にうつった。私のグループでは、全員が違う資料を読み、語り合いを通して資料の中身を少しずつ読み解いていった。ここで私自身の大きな収穫は、“子どもと教師の学びは相似形”についてである。これまで、たくさんの資料や講義でこのフレーズを耳にしてきて、なんとなくのイメージはあったものの、あまり自分の中におちている感覚が無かった。そこで、この場を借りて、思い切ってこの話をしたところ、同じグループのマネジメントコースの先生から「教師は子どもの姿を見て教え方を考える。その子その子によって教え方は違う。だからこそ何年たっても教師は初めてその子ど

もを見て学んでいく」と教えて頂いた。それを聞いて、だからこそ教師は子どもを見取る必要があるし、その見取りから教師自身も学び、成長していき、それをコミュニティ全体で考えていくことでコミュニティとしても学んでいく、その姿こそ相似形であるということなのだと思った。1人では、何となくの言葉でわかったつもりになっていたものが、他者の言葉によって、それも経験をもとにした言葉によって語られたことにより、自分と重ねてより深く理解することができるようになる。これこそ、協働の中で学んでいく価値なのではないかと改めて強く感じた時間であった。

そして、最後に長期実践研究報告の検討に入った。私は、昨年度修了された先輩の報告書を選んだ。実際に間近でその姿を見ていたからこそ、引き込まれるものがあつた。また、私には見えなかった裏での姿も描かれており、息をするのも忘れるくらい集中して読み進め、読み終えた後とても大きな満足感があつた。たくさんの失敗や苦しい経験を武器にかえて、乗り越えようともがく様子が生々しく描かれていた。だからこそ、読み手をここまでひきつけるものになるのだなと感じた。

今年度、私も長期実践研究報告を書くこととなる。このような素晴らしい先輩方の長期を読むと必ず「自分はこんなに書けるだろうか」とこれまでの自分自身の学びに自信が持てなくなる。しかし、それはその人の学んできた形であり、全く同じものを自分もしなければいけないわけではない。ただ、その姿を見て自分に活かすことはできる。この合同カンファレンスを通して、残り半分の大学院での学びを自分なりに可視化し、自分なりの学び方で学び続けていこうと思った。

## 4月月間カンファレンスを終えて

ミドルリーダー養成コース2年 / 福井大学教育学部附属幼稚園 村橋 義人

私にとって2回目となる4月の月間カンファレンス。もうあの日から1年が経ったのかと福井の地で過ごす時の速さに驚いた4月のカンファレンスでした。この2日間はとても濃い時間であったとともに、学ぶことの多い時間でもありましたが、1番の収穫は何だったのだろうかと考えました。すると真っ先に思い浮かんだことは「1年間の自分自身の成長を実感できたこと」でした。

入学前の私が教職大学院に抱いていたイメージは「賢い先生たちが難しい話をする場」「しっかりと話をしなくてはいけない」というようなものでした。そんなイメージを持っていた1年前の私は4月のカンファレンスで先生方と語り合う時に、自然と背筋が伸び緊張感を味わっていました。本当の意味で自分の言葉で話をすることができず、うまく自分の言いたいことが言えなかった私は、自分の語る力のなさに落胆しました。そんな風にして終えた初めての4月のカンファレンスでした。

しかしこの1年間、月のカンファレンスを含め夏と冬の集中講座で多くの先生方と語り合うことは、入学前に抱いていたイメージを少しずつ消していき、「ありのままでいいんだ」という思いを私に持たせてくれました。同時に多くの先生方との「語り合い」に魅力を感じるようになっていきました。語り合いの中で「話す」「聴く」ということを繰り返すことで、自分自身の文脈を振り返ることができ、成長できたことも多くありました。そして私が味わった「語り合う」ことの大切さや魅力を、令和6年4月に戻る予定である高浜町立保育所の先生たちにも味わってほ

しいと思い、オンラインと対面を併用しながら新たな語り合いの場を設定してきました。

そんな風にして1年間を過ごしてきた私は、今年の4月のカンファレンスで自身の変容や実践について、上手ではなかったかもしれませんが、自分の言葉で自信を持って話すことができました。もちろんこの2日間で多くの先生方と語り合う中で、学んだこと、再確認したことなど、多くありましたが、何より自分の成長を実感できたことが今年の4月のカンファレンスの中で一番嬉しかったです。

昨年度のニュースレター内の私の自己紹介の中に「この2年間で出会う、たくさんの方々との出会いを通し、再度自分の保育を振り返ることで、保育者として新たなスタートを切りたいと思っています」という一文を書きました。当時の私は、多くの人に読まれることになるだろうから、なるべく当たり障りのない文章を書こうと思って、この一文を書いたのかもしれませんが。しかし意図せず、1年後の私は、多くの先生方との出会い、語り合いを通し、自分自身の保育について、文脈について振り返ることができました。そして、今までの私とは違う新たな私としてスタートを切れたと思っています。

今年度も多くの先生方との出会いや語り合いを通して多くのことを学んでいきたいと思っています。同時に、私との語り合いを通して一人でも多くの先生に「語り合う」ことの楽しさや大切さを伝えていけたらと思っています。今後ともよろしく願いいたします。

## 4月カンファレンスを終えて

ミドルリーダー養成コース2年 / 福井県立若狭高等学校 横田 和也

怒涛の4月を終え、あっという間にゴールデン・ウィークが終わり、原稿〆切ぎりぎりの今、ようやく、この原稿を書いている。

思い返せば、講師として現場に出た23歳から10年以上、ずっと日々押し流されて過ごしてきた。水産高校、定時制高校、小学校、そして、全日制高校、その場その場で、目の前の仕事をこなすのに精いっぱいだった。もちろん、よりよい授業、よりよいクラス経営を求めて、書籍を読んだり、研修会に参加したりしてきた。しかし、やはり、日々の忙しさに押し流され、立ち止まって自分の経験や学びを整理し、軸をもって教育活動に取り組むことをしてこなかった。

昨年、教職大学院に入学させていただき、この4月カンファレンスを経験させていただき、一度日常生活から離れ、じっくりと教育資料や諸先輩方の実践研究報告を読ませていただく贅沢さ、読んだ資料をもとに、様々な現場・ご経験の方々と対話する豊かな学びの充実感を得た。

昨年の4月カンファレンスで一緒にいただいたO先生には、毎回のカンファレンスでお声がけいただき、今年の4月カンファレンスでもお声がけいただき、人とのつながりの温かさを感じることもできた。

さて、変化の激しい現代において、「多様性」や「対話」の重要性が増している。これまでも、書籍等で「知って」はいたが、「実感として」多様性や対話の重要性を学んだのは、教職大学院での学びである。そういった豊かな学びを積み重ねてきたが、4月の怒涛の忙しさの中で、気づけば押し流されるように日々を過ごしてしまっていた。

今回、4月カンファレンスに参加させて頂き、改めて、一度立ち止まって、教育資料を丁寧に読み、教育の大きな枠組みを再確認すること、その上で、多様な方々と対話することで、考えを広げ、深めることの大切さを感じた。

もし、このタイミングでカンファレンスがなかったら、そのまま1年間、押し流されて過ごしてしまっていたかもしれない。そういった意味で、大変ありがたい機会だった。

たくさん書きたいことはあるが、今回は1点に絞って、4月カンファレンスでのことを書こうと思う。それは、1人のストレートマスターの方との出会いだ。S君は、本校の卒業生で、高校2・3年次に、日本史Bを担当した生徒である。

4月カンファレンス1日目の朝、6Fへ向かうためエレベーターに乗り込んだ。「先生！」と声を掛けられ、最初は誰か気づかなかった。マスクをしていたせいもある。すると、私が、本校に赴任した4月から、日本史Bの授業を担当したクラスの生徒だった。もう7年前になる。私は、新採用で小学校に勤務した後、本校に赴任した。そのため、赴任1年目は、高校の授業に対応するための教材研究で精一杯であり、まさに模索に模索を重ねていたころの授業を受けていたのだ。

なかなかじっくりくる授業ができず、KP法を取り入れたり、自前でプロジェクターを購入してパワーポイントや映像を取り入れた授業をしたりしていた。「アクティブ・ラーニング」という言葉もよく使われた頃だったので、高校の授業でグループワークやペアワークをどのように取り入れるかも試行錯誤していた。

そのため、授業スタイルも学期ごとに変更を加えるなど、生徒の理解と協力無しには授業ができなかったと思う。そんな授業を受けてきたS君に再会し、S君は同じく社会科教員を目指して学んでいた。偶然にも、2日目最後のクロスセッションで、同じグループになった。色々お話しする中で、そんな私のもがいていた授業でも肯定的に捉えてくれていたようである。本当に有難いことだ。

また、S君のインターン先の学びの様子などを聞き、頼もしくも感じた。昨年は、新たな出会いの有難さを感じたが、今年は「再会」という有難さを感じ、本校赴任当初の自分自身を振り返るきっかけにもなった。

まさに「原点回帰」することができ、必死で「いい授業をしたい」ともがいていた頃の自分を思い出した。教職大学院での学びも後1年。理論と実践を往還しながら、必死でもがきつつも、よりよい教育の在り方、それを支えるコミュニティの在り方について学びを深めていきたい。

## 新たな1年のスタート 4月合同カンファレンス

学校改革マネジメントコース2年 / 品川区立荏原第一中学校 黒田 佳昌

教職大学院2年目がスタートした。4月合同カンファレンスは、1年の中でも中身の濃い2年間の教職大学院を凝縮したような重要な2日間である。昨年度のM2の先輩達がいなくて、新たなM1の方々を迎え、自分たちがいよいよM2としてやっていくのだという緊張と不安を抱きながら覚悟したスタートとなった。

思い起こすと1年前に自分が校長として、今までやってきたことがどうだったのか振り返る機会として、様々な校種や職層、年齢の人と対話することで答えが見つかるのではないかと考え教職大学院に入学した。しかし1年前の4月合同カンファレンスでは、先の見えない不安とグループでの「自己紹介」では、何をどのように話せばよいのか、大変緊張していたことが思い出された。自ら進んで飛び込んだ道であったが、人前で話をするのがこんなにも緊張し難しいものだと感じるとは思わなかった。帰宅してこれから2年間やっていけるのであろうか不安に思い、なかなか寝付かれなかったことを思い出す。

1年を振り返ると、毎月のカンファレンスやラウンドテーブルで多くの先生方との交流があった。それは校種、職層、経験など、様々な院生との交流であり、今まで体験したことのない刺激的で充実した時間となった。何より東京サテライトの福島先生をはじめとする教職大学院の先生方や院生との学びは、毎回新鮮でかけがえのない充実した時間であり、大きな壁を乗り越えてきた同志のようであった。また月によっては、修了生も参加していただいたことも

あり、院生、修了生の中で東京サテライトというものが一人一人にとって特別な存在となっていることが理解できた1年でもあった。また福井・宮古島・東京サテライトなどのラウンドテーブルでは、教師だけでなく、まったく違う職種の方とも出会い、まるで自分の知らない未知の世界へ誘われる感覚を覚え、勉強になることも多かった。

「3つの種」では、カンファレンスで仲間から語られる実践の展開をじっくり傾聴し、その人の活動の場面を想像し共有してきた。それぞれが実践の過程をじっくり語り、それを聞き合い、話し合う、互いに関係を築き、学び合う。その中で自分の実践を振り返り、他者の実践を聴くことで、自分も取り組んできた・・・、自分も悩んだ経験がある・・・、そんなこともあるんだ・・・、自分の学校でもやってみたい・・・、自分だったらどうするだろう・・・と自分にとって新しい学びの場と自分を振り返り省察する場になっている。

「長期実践研究報告を読む」では、昨年発表をお聞きした加福秀樹校長先生の実践記録を読んだ。先生は教務主任や研究主任をされていく中で、教職員が主体的になるためには、自分はどのように動くべきかということに常に考えておられた。リーダーシップを取ってはいるが裏方にまわり、教職員の活動を価値づけされていた。また加福先生の教育実践から小学校でも中学校でも子どもに責任を持たせて、選択させる、考えさせる、預けるということが、いかに主体的になるのかということに学ばせていただい

た。これは子どもにだけ言えることではなく、教師も同じであろう。教師一人一人の考え方はみな違う。校長として、学校の進むべき方向性をしっかり示すとともに、一人一人と対話を通して理解を図り、教師に責任を持たせ、任せる。いつでも相談にのることを伝えるとともに、新たなことへの挑戦に自信を持たせ、背中を押せる校長になりたいと強く思う。

クロスセッションの中では、昨年度職場で「カフェ」を開き、若手の仲間の同僚性が発揮できたという報告やカリキュラム検討に踏み込むために、教職員が感じていることや思っていることを出し合える、対話を大切にする集団にしていきたいという思いを聞かせていただいた。また学校経営の柱を「人材育成」と掲げ、人材育成が学校改革につながる、学校現場ではどのような人材が必要なのか、教職大学院での一番の学びにしていきたい思いを語る人もいた。

月に1度のカンファレンスで、自分の目の前にある教育的課題をどのように解決していくのか、目指

すべき方向性と自分の実践が合っているのか、自分の言葉で仲間である院生に伝えていきたい。そして、一人で考えるのではなくグループで考えることで、協働的に探究しながら自分の中で深めることができればと思う。

私は今春、異動となった。前任校での1年間の実践を振り返るとともに、新たな職場での教職員との関係づくりや学校の「強み」と「弱み」を探り、具体的な方向性を示さなければならない。前任校に比べ、教師同士の対話が自然と出てきて、活気のある教師集団である。その対話こそがわれわれ教師にとって大切なことだと実感した。自然と対話する環境と意図的・計画的に対話を通じた実践コミュニティの創出、そして互いを認め支え合える安心感のあるチームを目指したい。

最後の1年間、教職大学院の先生方や同志であるたくさんの院生と対話を通して有意義な時間を創り、成長したいと思う。

## 4月合同カンファレンス報告

学校改革マネジメントコース2年 / 坂井市立丸岡南中学校 福嶋 大晃

「令和の日本型学校教育」の資料を読んだ。「主体的な学び」とは「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげること」と、今まで何度も目の前を通過していただろう文言が、やっと私の目の前で止まった。特に「見通しをもって」という部分に引っかかった。それは、昨年度の実践で、活動の意義を考えた生徒たちが、勝手に見通しをもちゴールに突き進んでいった様子と重なったからだ。活動の意義を自分で考えることで、主体的な学びが始まっていくような気がしている。今の私も、今後の見通しをもつタイミングである。今年度の校務分掌の意義をよく考えて、実践・省察に取り組みたい。また、「理論と実践の往還は、教職大学院において同制度導入以来の中核的な理念であるが、学部段階での養成も含め、理

論と実践を往還させた省察力による学びを実現する必要がある」と、教職大学院で学ぶべきことも見つけた。魚釣りでは「釣りキチ三平」を理論として驚異的な釣果につなげているが、学校では「コミュニティオブプラクティス」や「学習する組織」を理論として学校での実践に照らして省察し、組織を動かすための学びをしたい。

丸岡南中学校の教員としても教職大学院の学生としても大先輩、奥村先生の長期実践研究報告を読んだ。中学生が地域の方と協働する活動を仕掛け、地域の方が中学生の活躍を応援することで「地域に誇りとなる学校」とする実践だった。奥村先生が大学院2年目のはじめに考えていたことに注目した。奥村先生は、教務主任として「地域と進める体験推進事業」を学校の年間計画や校務分掌に取り入れ、コミュニ

ティをつくる見通しを考えていた。そして、他の長期実践研究報告から、コミュニティを成功させるための秘訣「取組に携わる者それぞれが当時者意識を持って主体的に関わるには、よく語り合いビジョンを共有することだ」と、同僚性の大切さを読み取っていた。私が丸岡南中学校へ異動した1年目・2年目の実践だったため懐かしく感じながら読んでいたが、奥村先生が仕掛けた活動やコミュニティは、残っていない。行事の精選・コロナ感染拡大・教員の働き方改革…、様々な要因があると思う。地域と共にある学校を持続可能とするためには、生徒・地域・教員にとってwin-winとなるように考えて活動を改めていかなければならないと思った。

4月合同カンファレンスで、資料を読み、グループで対話し、私の中に残ったキーワードは「見通し」だった。そこで、今年度の実践の見通しを書く。長期実践研究報告に書きたいと考えている実践は3点である。1点目は、中学生の地域行事への参画について。中学生が地域の祭りに労働力としてのみ参加するのではなく、地域の祭りで中学生が企画・運営に関わることもできるよう仕掛けたい。そのために、私が管理職・地域コーディネーター・代表生徒とのつながりをどのようにしたか、省察する。2点目は、「地域と進める体験推進事業」について。中学生が仕事をする目線で活動できるよう仕掛けたい。そのために、代表生徒に企画書作成・企業へのプレゼンを任せ、企業から

アドバイスをもらい、事業を実施する、という流れを計画している。私が企業・代表生徒とのつながりをどのようにしたか、省察する。3点目は、研究副主任という微妙な立ち位置について。今年度の研究の目玉は「総合的な学習の時間に、縦割り班でSDGsの学習をする」ことである。研究を推進するため、私が研究主任と総合的な学習担当とのつながりをどのようにしたか、省察する。3点の実践の見通しを書いたが、全てキーマンとのつながりであった。今の私にとって、「組織を動かす」ためには「キーマンとつながること」が大切だと感じているようである。

この作文を書きながら、1年前の4月合同カンファレンスは何をしていたのだろうか？と、思い出した。まず、「福嶋さん、“30分間”どうぞ。」と、割り当てられた時間の長さに大量の汗をかいた。他の先生の発表について感想を求められ、頭の中が真っ白になった。次に、教育改革資料の内容を理解することができなかった。提出したレポートには、言葉の意味について質問し、教えていただいた意味を書いてあるだけだった。他に、長期実践研究報告を10ページしか読めなかった。もちろん、長期実践研究報告の感想文を書くこともできなかった。自分の「読む・書く・聞く・話す」基礎・基本の力の低さに気を落とした。今も、同じグループになる先生方に圧倒されっぱなしだが、私は、1年間で少し成長した気がした。今後ともご指導よろしくお願ひします。

## 問い続けていく

学校改革マネジメントコース2年 / 岐阜市立徹明さくら小学校 宮谷 郁江

4月のカンファレンスは、私にとって、自分の変化を自覚する時間であったのと同時に、めざすべきものを改めて自分自身に問い直す時間であったように思います。そのことを、このニュースレターに書かせていただこうと思います。

今回の4月のカンファレンスも1年前のように、対面で参加しました。教職大学院1年目の方たちとの新たな出会いや、1年前、ここで出会った人との再

会がありました。そんな中で、ちょうど1年前、福井大学を訪れ、4月のカンファレンスに対面で参加したときの自分を思い出していました。自己紹介をするときにも、「令和の日本型教育」についての資料を読み、それについての考えを話すときにも、「自分のこの発言は、正しいのか」と不安に思いながら周りの人たちを気にしながら参加していました。初めての場所での緊張もあったのだと思います。でも、その頃

の私にとって、「自分の発する言葉が、正しいか」がとても重要でした。でも、あれから1年が経った今回の2日間のカンファレンスでは、自己紹介も、3つのグループでの対話も、それに向かう自分の気持ちが違うものになっていることに気が付きました。「自分の言葉が正しいか」ということよりも、「他の人たちは、どんなことを話すのだろう」ということや、「自分の話に、どんな反応をしてくれるのだろう」という気持ちが強くなっていました。それは、1年間の大学院での学びの中で、多くの人たちとの対話を通して、自分を受け入れてくれる場であることの安心感と、私自身、自分が大切にしてきたことや、自分の歩みの自覚が、そのような前向きな気持ちへと変化させたのではないかと思います。

私は、昨年度、徹明さくら小学校で、若手の教職員が気軽に参加し、授業や学級経営などについての悩みや実践を交流できる会「クレリア会（現在、さくらホワイツの会）」を始めました。今年度も引き続き、この会を継続していきます。徹明さくら小学校の若手職員にとって、「自分を受け入れてくれる場所」だったり、「自分自身を見つめ、変化を起こせる場所」だったりするような場が「さくらホワイツの会」であつたらいいなと改めて感じました。そのために、私は、コーディネーターとしてやるべきことを模索し、実践していこうと思います。

「あなたは、教師として何をめざしていますか」  
「目の前のことを一生懸命にやっていたらいいのですか」

この言葉は、カンファレンスでの小林真由美先生のお話の中で、私に痛烈に突き刺さった一言です。ご

自身がかつてかけられた言葉であると聞きました。なぜこの言葉が突き刺さったのかというと、私がまさに、目の前のことをがむしゃらにやっている人間だからです。今年度は、教務主任という初めての役職となり、今も目の前のことに必死です。それは、生き方としてカッコいいように見えます。それに、そうせざるを得ない状況です。でも、小林先生からの問いに、「教師としては、目の前のことに一生懸命にやっているだけではだめだ」と、私は心の中で即答しました。

長期実践報告は、北典子先生の「『協働』を支える教師間の自律性と同僚性についての一考察」を読み進めました。それは、北典子先生の勤められた中学校の取組について、教職員の自律性と同僚性を育みながら、「協働」関係を構築していくということに視点を置いて描かれている報告書でした。長期実践報告を読み終え、小林真由美先生の言葉を再び思い返しました。

昨年度、とにかく一步を踏み出そうと出発した「さくらホワイツの会」ですが、私のめざす「協働できる職員集団」とはどんな集団なのだろうか、そして、そのために「さくらホワイツの会」は、どのような場にする必要があるのかということが、今このニュースレターを書きながらも、グルグルと頭の中を回っています。まだ頭の中は整理されていません。答えはハッキリと出ていません。でも、今年度は、「私がむしゃらにやってみる」から、「めざすもの」を自分の中で明らかにしながら実践していこうと思います。そして、それを管理職や同僚と対話し、共有しながら進めていこうと思います。



## 公開研究会等

# 福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校 令和5年度 教育研究集会 (第2次案内)

### 幼稚園研究主題

「つながりが育む学びの深まり」

#### 幼稚園研究副題

「好きが広がり、世界をひらく」

### 義務教育学校研究主題

「自律的な学びへのイノベーション  
探究するコミュニティを培う」

#### 義務教育学校研究副題(5年次)

「共に学ぶプロセスをデザインする」

学校HP QRコード



期日 **令和5年6月16日(金)**

会場 福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校

主催/福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校

後援/福井県教育委員会 福井市教育委員会

福井県小学校教育研究会 福井県中学校教育研究会

## 附属義務教育学校

受付	児童生徒による オリエンテーション	公開授業Ⅰ/語り合い	公開授業Ⅱ/語り合い	昼食	分科会
8:10	8:50	9:45 10:00	10:55 11:10	12:10	13:00
		10:00	10:55	12:10	14:15

### 公開授業Ⅰ（10:00～10:45/50）児童生徒との語り合い（10:45/50～10:55/11:00）

教科/学級/授業者	主題 / 「単元・題材」 / めざす授業
<b>国語</b> 6年2組 授業者：野阪 友美	<b>視点が変わると見えてくるものって？ 「帰り道」</b> 「律」と「周也」、二人にとって今日の帰り道とはどのようなものであったのだろうか。それぞれの視点で描かれた物語を読み比べながら、二人のストーリーが一つに重なっていく。仲間と語り合いながら、視点を変えて読むことによって、新たな「読み」の面白さを味わう授業。
<b>社会</b> 4年1組 授業者：青柳 宏治	<b>無くなったらどうする？～優先すべきインフラとは～ 「住みよいくらしをつくる」</b> 優先して維持すべきインフラはどれだろうか？生活の中に当たり前にあるインフラのしくみや工夫を明らかにしながら、優先すべきものを考えていく。様々な考えや異なる立場の意見を取り入れながら、住みよいくらしに欠かせないインフラと自分の関わり方を考えていく授業。
<b>算数</b> 2年1組 授業者：堀 歩美	<b>シャボン玉をつくろう 「かさ」</b> ○○なシャボン玉を作りたい。いくつかの液体を混ぜて、自分たちが目指す理想のシャボン玉を作るため、試行錯誤する子供たち。自慢のシャボン液の作り方を伝えるために、単位の必要性に気付く授業。
<b>理科</b> 4年2組 授業者：川崎 耕介	<b>飛び出せ！ツバメ調査隊！ 「あたたかくなると」</b> ツバメは1年をどのように過ごしているのだろうか。ツバメに寄り添い、ツバメの生活コミュニティの変化の観察や生息域の分布調査を通して主題に迫っていく。ツバメの生活から季節の変化を感じると共に、ツバメと人間との共生について自然に対する価値観を広げていく授業。
<b>音楽</b> 1年2組 授業者：大黒 朋恵	<b>きこえたおとをこえであらわそう 「おとをさがしてあそぼう」</b> 一日の学校生活では、どんな音が聞こえるだろう。子供たちは、耳を澄まして様々な音を見つけ、見つけた音を友達と試行錯誤しながら一日の学校生活を声で表現していく。声で表現する活動を通して、音を声で表す面白さを味わうとともに、友達とつながるよさを感じることができる授業。
<b>造形</b> 3年1組 授業者：浅井 綾子	<b>体いっぱいにしぜんをかんじて 「わたしの6月の絵」 「身近な自然の形・色」</b> 今の季節から何を感じるかな？身の回りにあるものを見つめたり体で感じたりして、自分のイメージを再認識し、色や形で探っていく。自分や友達の季節のイメージを共有する中で、違いや似ているところを見つけるおもしろさを味わい、自然を通して色や形の感じ方を広げていく授業。
<b>体育</b> 2年2組 授業者：市村 拓也	<b>お宝を探し出せ！蹴(しゅう)ティングゲーム 「ゲーム(ボールゲーム)」</b> 「お宝をかくし持つモンスターはどこだ！」子供たちはモンスターを倒すため、狙ったところに、勢いのあるボールを蹴ることができるように仲間と共に技を磨く。そのプロセスを通して、蹴動作の粗形態の獲得と協働探究の楽しさを実感していく授業。
<b>外国語</b> 6年1組 授業者：布目 康裕	<b>設立! FUZOKUツーリスト～おススメ旅行プランを発信しよう～ 「NEW HORIZON Unit3 Let's go to Italy.」</b> 海外から見た日本の魅力って？外国人観光客が来日する機会が戻ってきた昨今、観光客の視点で、おススメの旅行プランを考える。自分の経験も振り返り、他者との英語でのやり取りを通して、表現の良さやプランの違いを認め合いながら、英語で伝わる喜びを実感することができる授業。
<b>家庭</b> 8年A組 授業者：八田 玲子	<b>家族と住まい 安心できる 毎日を 「住生活 安全な住まいで安全な暮らし」</b> 毎日安心して過ごすって、どんな暮らし方だろうか？身の周りで起こる危険や避難生活と日頃の生活を比べ、暮らし方について探っていく。危険や災害に備えた日常について考え、実践につなげる授業。

### 児童生徒との語り合いについて（各教科の授業後10分間）

授業で見取ったことを、直接児童生徒と語り合い、お互いの学びを深める時間として設定しています。ぜひ授業を受けていた児童生徒と教科の学びについて語り合ってください。

## 公開授業Ⅱ (11:10~12:00) 生徒との語り合い (12:00~12:10)

教科/学級/授業者	主題 / 「単元・題材」 / めざす授業
<b>国 語</b> 7年A組 授業者：野尻 麻香	<b>スピノフ朗読劇、開演！ 「星の花が降るころに」</b> 「私」以外を主人公にしたら、どんな新しい物語が見えてくるだろう。人物描写や情景描写を根拠に物語を別視点から捉え直し、さらにグループで対話しながら朗読劇を創作することで自分たちの解釈を表現する。協働でシナリオを創作することで、互いの読みや人物像を交流しながら主体的に読みを深めていく授業。
<b>社 会</b> 8年B組 授業者：北島 正也	<b>人口減少時代の日本を救え！ 「日本の地域的特色と地域区分」</b> 人口減少が進む日本に明るい未来は訪れるのだろうか？人口減少問題の原因を探る中で、日本の地域的特色を明らかにし、日本が抱える数々の課題とその解決可能性を考える。人口問題を切り口に地域の課題について考察する授業。
<b>数 学</b> 9年C組 授業者：藤川 洋平	<b>最高のリレーを探究しよう 「二次関数」</b> リレーで勝ちたい！そのためにできることは走力やバトンパスの技術の向上以外にないのだろうか。流れるようなバトンパスを成功させるために、数学的な視点から「走り」について考えていく。協働で人の走りを見える化し、新たな視点からリレーを探究していく授業。
<b>理 科</b> 9年A組 授業者：佐々木 庸介	<b>歩く速さ世界を目指せ！ 「物体の運動」</b> 大阪の人の歩く速さは世界で最も速いらしいが、自分たちの速さはどのくらいで、どうしたら大阪の人より速く歩けるだろう。子供たちはグラフや表を用いて計測結果を分析し、加速時間を確保したり力の加え方を変えたりして、速く歩く方法を探究していく。自身からデータを取り、科学的な思考によって日常生活を変えていく授業。
<b>音 楽</b> 8年A組 授業者：遠藤 利佳	<b>きみは何役？—「ヤクアテ」ゲームで音楽を感じ取ろう！— 「即興演奏」</b> 「即興演奏」とは、何だろうか。子供たちは声や楽器などを使い、これまでのリズム活動や音楽づくりでの学びを生かしながら、テーマに沿って仲間と即興演奏を行う。演奏をクラス全体で味わい、様々な表現を認め合うなかで、自身の音楽観を広げていく授業。
<b>美 術</b> 8年C組 授業者：坂居 澄美	<b>学校にパブリックアートがあったら 「暮らしに息づくパブリックアート」</b> 暮らしの中に溶け込んでいるパブリックアートの面白さってどこにあるのだろうか。校内にある身近な風景に目を向け、どんなアートで彩られると豊かな気持ちになるか想像してみよう。その作品たちが風景と融合した景観を味わい、美術と社会がつながる楽しさを感じとる授業。
<b>保健体育</b> 7年B組 授業者：田中 孝治	<b>これが7B流！ハードル走の極め方 「ハードル走」</b> タイムを縮めるためにはどうすれば良いだろう。スタートからゴールまで、解決のカギになりそうなポイントを見つけ、チームで徹底的に分析。メンバーの合計タイム短縮を目指す中で、ハードル走という種目の特性を探っていく授業。
<b>英 語</b> 9年B組 授業者：河合 創	<b>How should we live with animals? 「Unit 3 Animals on the Red List」</b> 絶滅危惧種の動物たちは守るべき存在なのだろうか？人間の生産活動と動物の種の保全という矛盾について考えながら、人と動物の共生について考えていく。世界各地のデータを整理し、英語での議論を重ねながら、思考を再構成する授業。
<b>技 術</b> 7年C組 授業者：高井 茂嘉	<b>県産材を使って、附属の校舎に必要な製品をDIYしよう</b> 学校生活で足りないものはないだろうか？子供たちから附属の校舎に必要な製品を調査して、周りからの要望に応じて製作していく。県産材の良さを味わいながら、アイデアを形に変える楽しさや、協働で作り上げることの喜びを実感する授業。

### 分科会 (13:00~14:15)

#### ①各教科の分科会 会場：義務教育学校の各教室

前期課程と後期課程の公開授業における子供たちの学びの見取り、子供たちとの語り合いをもとに協議していきます。教科の目指す本質的な学びについて語り合いながら、義務教育課程における協働探究の在り方について考えていきます。

#### ②幼稚園の分科会 会場：幼稚園

実践を通じた3・4・5歳児の幼稚園での育ちについて協議していきます。  
分科会は3歳児・4歳児・5歳児合同で行います。

## 附属幼稚園

受付	オリエンテーション	公開保育	公開授業Ⅱの参観	昼食	分科会(3,4,5歳児合同)
8:30	8:50	9:00	10:55	12:10	13:00
保育者		主題 / めざすあそび			
<b>あそび</b> 年少/年中/年長 保育者:前田 祐子 藤井 衣利子 金剛 智恵子 村橋 義人 上田 晴之 ツシマ由佳		<b>年少(3歳児) はやくあそびたい</b> 一人一人が安心して過ごせる環境の中で、新たなもの・こと・人・遊びに出会い、心地よさを感じながら遊びを楽しんでいく。いろいろな遊びに出会い、自分の好きな遊びを見つけていくには?教師に自分の思いを伝えたり、友達と一緒に遊んだりしながら喜んで園生活を送ることを目指す。			
		<b>年中(4歳児) いっしょにあそぼ</b> 好きな遊びを楽しむ中で、友達や教師、様々な素材などの、自分を取り巻く環境に自ら関わっていく。関わりの中で、自分や友達に思いがあることに気づき、また他者との思いの違いにも気付いていくには?いろいろな思いに触れながら、友達と一緒に遊び、楽しむことを目指す。			
		<b>年長(5歳時) ちからをだして</b> 積極的にいろいろな遊びに取り組む中で、自分なりのめあてをもって挑戦したり、友達と協力したりしながら遊び込んでいく。その中でもの・ことの特徴や面白さに気づき、試したり工夫したりしていくには?遊びの中で感覚をひらき、自己を発揮していくことを目指す。			

## 全体会・シンポジウム (14:30~16:30)

### テーマ「共に学び多様性を発揮する教育の未来 ~PBLが拓くインクルーシブな学び~」

#### シンポジスト

秋田 喜代美氏  
(学習院大学文学部 教授)

鹿毛 雅治氏  
(慶應義塾大学教職課程センター 教授)

森川 禎彦  
(福井大学連合教職大学院 客員准教授  
附属義務教育学校 統括研究主任)



秋田 喜代美氏



鹿毛 雅治氏



木村 優氏

#### コーディネーター

木村 優氏  
(福井大学連合教職大学院研究科長 教授)

#### オンライン生配信決定!

オンライン (Zoom) にてシンポジウムの様子を生配信します。ご希望の方は下記QRコードよりお申し込みください。後日、ID、パスコード等をメールにてご連絡いたします。

すべての子供たちが多様性を発揮する教育を実現するためにはどうすれば良いのか。本校園が長年大切にしてきた学びであるPBL(Project Based Learning)がその未来を拓いていく鍵になると考えています。人々が互いに多様な在り方を認め合える共生社会の実現のために、ご参加頂いた皆様と子供の学びの姿を語り合う中で、これからの教育はどうあるべきかを考えていきたいと思ひます。

### 参加費 1,000円 (資料代)

※参加される方は、ご昼食を各自でご準備ください。  
※申し込み方法: 右のQRコードより必要事項をご記入の上、

令和5年6月2日(金)までにお申し込みください。

問合せ先: 担当: 森川(義務教育学校)・上田(幼稚園)  
〒910-0015 福井県福井市二の宮4丁目45-1 Email: molmol3@u-fukui.ac.jp  
tel.0776(22)6985 fax.0776(22)6703 HP:http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/

申し込み用 QRコード



# 実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:  
Summer Sessions 2023  
for Reflective Practice  
and Organizational Learning  
in University of Fukui

*For Communities of Practice and Reflection, since 2001*

## 実践研究 福井ラウンドテーブル

2023 Summer sessions

17(sat) 9:00-17:40

18(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）・総合研究棟 I  
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

# 2023.6.17-18

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科  
後援 福井県教育委員会

online-offline hybrid sessions with Zoom

実践研究  
福井ラウンドテーブル  
2023 Summer sessions  
Round Table Cross Session in University of Fukui  
since 2001

6/17(sat) 9:00-17:40 (Zoom 接続開始 8:30)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 9:00-11:00

「新たな教師の学び」を支える協働のために  
—協働探究型研修の創造・展開への企図の現段階—

Poster Session I ポスターセッション 11:20-12:20-大学生・社会人- (Zoom 接続開始 11:00)

Poster Session II ポスターセッション 13:10-14:10 -児童・生徒- (Zoom 接続開始 12:50)

Session II

学校・教育・地域を考える 5つのアプローチ 14:30-17:40

- A 学校/インクルーシブ:21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う  
—多様な子どもたちの学びと育ちを支えるコミュニティを培う—
- B 教師教育:学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
- D International:International Initiatives on Collaborative Learning
- E 探究:学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがたカタチをみんなで考(かん)がえる  
—学(まな)びと教(おし)えのあたらしいパートナーシップ—

6/18(sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。次の URL からでも申込可能です。 <https://forms.gle/MrsJjYjB1J4DhDa7>
- 6/18 の session III の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。
- 6/18 の session III の参加についてのお願いは午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。プログラムの変更等があり得ます。最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ <http://www.fu-edunet/> をご確認ください。実践研究福井ラウンドテーブル summer sessions 2024.6.17-18

by PK 2022.11.11

## Schedule

- 5/20 Sat.** 5月月間合同カンファレンス **A** 日程
- 5/24 Wed.** 運営協議会(連合教職開発研究科及び総合教職開発本部)  
(当初の **5月16日** から変更になっています)
- 5/27 Sat.** 5月月間合同カンファレンス **B** 日程
- 6/17,18 Sat, Sun.** 実践研究福井ラウンドテーブル **2023 Summer Sessions**
- 7/1 Sat.** 7月月間合同カンファレンス **A** 日程
- 7/8 Sat.** 7月月間合同カンファレンス **B** 日程
- 7/22 以降** 夏期集中講座 **Cycle1(a:7/22,23,24), (b:7/25,26,27)**  
**Cycle2(a:7/29,30,31), (b:8/1,2,3)**  
**Cycle3(a:8/5,6,7), (b:8/16,17,18)**

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。  
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。  
関心がある方は、[dpdtfukui\\_nl@yahoo.co.jp](mailto:dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

【編集後記】新年度が始まって、2か月が過ぎようとしています。スタートの時期に企画したことは、順調に進んでいますか。手つかずのまま、時が過ぎていることや、じっくり練り上げたはずなのに、うまくまわっていないことはありませんか。ちょうど今が、良い振り返りのタイミングだと思います。軌道修正を図ってみてはいかがでしょうか。6月には、附属義務教育学校研究会、そしてラウンドテーブルも行われます。ぜひ、ご自身の実践を省察するチャンスとして、積極的にご参加ください。(M)

教職大学院 Newsletter

No.171

2023.5.31 公開版発行

編集・発行・印刷  
福井大学大学院 福井大学・  
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学  
連合教職開発研究科  
教職大学院 Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京 3-9-1  
[dpdtfukui@yahoo.co.jp](mailto:dpdtfukui@yahoo.co.jp)